

演劇は 社会の 処方箋

やってみようプロジェクト

文化庁委託事業
令和1年度障害者による文化芸術活動推進事業
(文化芸術による共生社会の推進を含む)

はじめに

福島明夫
(専務理事)

2017年度にスタートした本事業「やってみようプロジェクト」も四年目を迎えました。社会的包摂という耳慣れない言葉が、個々の劇団が地域や施設で展開してきた演劇的手法を活用したワークショップ活動の根源的意義を表すものであることを教えられて四年目ということにもなります。

高等学校における不登校や中途退学の減少という課題に向き合った岐阜県立高校における文学座の実践があり、また若者の自立支援を課題とした劇団銅鑼、さらには高齢者施設や特別支援学校等における実践を積み重ねていた劇団朋友の取り組みなど、加盟劇団それぞれに行なわれてきた活動を当法人事業とすることで、社会的な経済効果も含め実証的に検証したいという試みでした。そのため昨年度までの報告書は、各ワークショップそれぞれの実践を評価専門家がSROI (Social Return on Investment: 社会的投資収益率) などの手法を用いての評価分析を行ない、数値化することを中心に置いています。私たちの活動がどのように数値化され、社会的に可視化出来るのかは、公共的な投資の必要性を行政や主権者に対して説明する上で大きな役割を果たすことが期待されたのです。ただ昨年までの報告書で明らかのように、全てのプログラムがSROIを算出することが可能なわけではなく、部分的なものに止まったことも事実です。

その上で今年度の報告書は、よりそれぞれの実践の詳細な記録に重点を置いたものとししました。その要因の一つには予算が十分に確保できなかったという問題点もありましたが、一方でそこで起きている事実、経験を直接伝えることが、説得力を持ち得るのではないかという思いもあります。この三年間のワークショップ実践の積み重ねは、この活動の広さと深さを思い知らされるものでもあったからです。「社会的包摂」と言った場合、その対象は極めてひろいものがあります。8050問題と言われる長期的な引きこもりは、家庭そのものが社会から孤立した状態になっていると指摘されていますが、劇団銅鑼が実施している若者演劇ワークショップの対象年齢も50歳以下となっています。また、青年劇場が実施しているさいたま市若者自立支援ルームでの演劇ワークショップの参加者も15歳から30歳代です。こういった社会から隔離した状態にある青年たちにどう働きかけられるのか。NPO団体等との協働作業によってどこまで広げられるのか。一方で劇団朋友が実施している対象は、特別支援学校や児童養護施設、さらに介護老人施設でのワークショップは、学校や社会福祉施設との協働作業です。それぞれの施設での日常がある中で、演劇ワークショップが参加者に内在している力を引き出し、施設職員や教員の見方を変え、人間関係に変化を与えているのです。それは兵庫県立ピッコロ劇団

が実施している在日外国人を対象とした演劇ワークショップで、さらに顕著に現れていると言えます。ワークショップの実施が外国人同士の間関係を豊かにするばかりでなく、日本人と在日外国人との関係も変えていく姿が読み取れます。

さらに言えばこの事業を四年間継続出来たことで、ファシリテーター、援助者として参加している演劇人自身の指導内容、向き合い方も磨かれてきたと言えるでしょう。このワークショップを実施するにあたり、ファシリテーターのためのワークショップや交流懇談会なども実施してきましたが、そのことが演劇人の持つ専門性をより際立たせるものになってきたのだと思います。

昨年度までの三年間は、文化庁戦略的芸術文化創造推進事業に組み込んでいただいたの実施でしたが、今年からは障害者による文化芸術活動推進事業(文化芸術による共生社会の推進を含む)として支援していただいています。ただこの事業の実施は、その支援をより豊かな実りを社会に還元していることは、この報告書をお読みいただければお判りいただけるものと思います。

今日の社会的課題解決のためには、この活動が全国各地に広がり、より広い層に向かっているものになることが求められています。本報告書が特にそれらの課題に直面している行政担当者の目に触れ、その一助となることを期待したいと思います。

やってみようプロジェクト

実施ワークショップ

- 高齢者対象／介護老人福祉施設「はるびの郷」
- 青少年対象／児童養護施設「杉並学園」
- 障害者対象／都立石神井特別支援学校
- 青少年対象／さいたま市若者自立支援ルーム
- 青年対象／若者演劇ワークショップ in 東京
- 在日外国人対象／「にほんごであそぼう」

調査研究

- 在日外国人対象ワークショップ「にほんごであそぼう」
- 岐阜県立不破高等学校での文学座演劇ワークショップ
- 日本演劇情動療法協会による富沢病院での活動

はじめに	2
ワークショップ活動レポート	
■コミュニケーションワークショップ/介護老人福祉施設「はるびの郷」	6
■コミュニケーションワークショップ/児童養護施設「杉並学園」	10
■コミュニケーションワークショップ/都立石神井特別支援学校	14
■演劇ワークショップ/さいたま市若者自立支援ルーム	18
■若者演劇ワークショップ in 東京/ワーカーズコープ連合会	22
調査研究報告	
■「にほんごであそぼう」在日外国人対象ワークショップ /小野市国際交流協会・小野市ふれあい交流館エクラ	26
数字を支えるエピソード ～不破高校、エクラ、富沢病院での演劇の力を活用した取り組みから～	41
社会包摂から「社会的処方箋」として劇場価値へ向かう	51

執筆者略歴

●ワークショップ活動レポート (P6~25)

川添史子 編集者/ライター。演劇情報誌「シアターガイド」を経て現在フリー。現在は演劇パンフレット、雑誌、劇場広報誌などで、演劇の現場取材、演出家、俳優などの取材執筆などを手掛ける。ムック「シアターワンダーランド」(びあ、共編)。「リンネル」(宝島社)で演劇連載中。

●調査研究報告 (P26~39)

千葉直紀 社会的インパクト評価・社会的インパクト・マネジメント、プログラム評価、発展的評価を活用した社会的事業(NPO、企業、行政等)の改善・マネジメント支援等に取り組む。CSOネットワーク インパクト・マネジメント・ラボディレクター。中小企業診断士、認定ファンドレイザー。

●数字を支えるエピソード～不破高校、エクラ、富沢病院での演劇の力を活用した取り組みから～ (P41~50)

古賀弥生 九州産業大学地域共創学部地域づくり学科教授。博士(京都橘大学、文化政策学)。アートサポートふくおか代表。アートサポートふくおかでは、「誰もが芸術文化を身近に楽しめる環境づくり」をミッションに子どもから高齢者までさまざまな人を対象とした芸術体験ワークショップのコーディネート、ホームレスのための応用演劇によるコミュニケーション講座やパーキンソン病患者のダンス活動の成果検証などに取り組む。著書に『芸術文化と地域づくり～アートでひととまちをシェアせに～』(九州大学出版会、2020年)ほか。

ワークショップ活動レポート

川添史子

- コミュニケーションワークショップ/介護老人福祉施設「はるびの郷」
- コミュニケーションワークショップ/児童養護施設「杉並学園」
- コミュニケーションワークショップ/都立石神井特別支援学校
- 演劇ワークショップ/さいたま市若者自立支援ルーム
- 若者演劇ワークショップ in 東京/ワーカーズコープ連合会

調査研究報告

千葉直紀

- 「にほんごであそぼう」在日外国人対象ワークショップ

コミュニケーションワークショップ 介護老人福祉施設「はるびの郷」

協働団体／社会福祉法人はるび

●対象者：特別養護老人ホーム入所者、デイサービス利用者、地域の高齢者

●講師：西海真理（俳優／劇団朋友）

●実施期間：2019年7月10日～11月3日（全8回）

●プログラム内容

多様な演劇的手法を取り入れたワークショップで、高齢者が自由に表現し新たに出会う人とのコミュニケーションの楽しさを体験することで、地域のコミュニティの活性化や身体的・精神的な刺激を通じたQOLの向上を目指す。また、施設職員やボランティアの担い手と共に取り組むことで、年齢を超えた共生と互いの学びへとつなげる。

高齢者に内在する力を引き出す

8月14日、介護老人福祉施設「はるびの郷」で開催された高齢者向けワークショップ。この日は対象者の違う2つのワークショップがあり、まず午前中は、施設内にある特別養護老人ホーム(多くの方が認知症)の入所者向け。参加者16名(半数は車椅子)、講師1名、アシスタント2名(いずれも劇団朋友)、施設職員が7名。

施設の2階、通常は入所者が憩うスペースが、この日のワークショップ会場だ。開始時間が近づくと、職員に連れられて少しずつ参加者たちが集まり、用意された椅子に座る。まずは鼻から息を吸って口から出す、呼吸のウォーミングアップ。「ああ」「いい」と、呼吸を徐々に声にしていく。深い呼吸、大きな声を出すことで、左脳あるいは(ポジティブな心の動きをもたらす) 楽観脳に刺激を与える。

次に「〇〇です！」と手を上げながら自分の名前を言うワーク(ネームゲーム)。次に「わたしあなた」というワーク。自分を指して「私」と言い、次に誰かを選んで指さしながら「あなた」と言い、さされた人は同じことを繰り返し……と次々につなげていく。「あなた」と言われた人は自然と笑顔になり、以前は自由に体が動かなかったという車椅子の男性が、上手に手を出して「私」「あなた」をやり遂げると、職員からも驚きの拍手が起こった。

2人組で向かい合わせになり、鏡のように相手と同じ動き、表情を真似るワーク(ミラー)では、ペアの動きに「面白い！」と笑い合う場面も。

最後は《幸せなら手をたたこう》を歌いながら、歌詞を「膝たたこう」にして膝をたたいたり、「頭撫でよ」で自分の頭をさすったり、「笑いましょ」には全員が「ニカ～」と良い笑顔をつくったり。「お隣見ましょ」では、隣の人と顔を見合わせてニコニコと向かい合っていた。

わずか45分間のワークショップだが、集合した時は無

表情だった高齢者の方たちが、みるみる表情が柔らかく変化していった。人と目を合わせて同じ動きをしたり、大きな声で名前を呼ばれたり、人との交流、コミュニケーションによって体に血が巡っていったような印象。終了後、この日、初めて参加した入所者が「楽しかったです、またきてください」とアシスタントに声をかけたり、普段はあまり喋らないという男性が「ありがとう」とつぶやいて帰っていった場面も。

同じ日の午後は、施設1階に移動。こちらはデイサービスの利用者(認知症の方を含む)を対象にしたワークショップだ。参加者は、歩行器がないと動けない人を含めた20人。部屋いっぱいいたが、これでもお盆で参加人数は少なめだという。参加した施設の職員は4人。昼食を食べた直後で参加者たちは少し眠そうに見えたが、ワークを進めていくうちに、前のめりになってきた。

深呼吸に対して講師が「いい音がしてますよ！」と語りかけると呼吸の音がどんどん大きくなったり、「ミラー」でも笑いがいっぱい。周囲を気にしたり、少し恥ずかしそうにやっている人に講師が「オーケーですよ～」と声がけると、その人から照れたような表情が消え、ワークに集中するように変化した。アシスタントが率先して声を出し、動いているので、その真似をしているうちに参加者たちの表情も、体の動きも大きくなっていく。

こちらの最後も《幸せなら手をたたこう》を全員で。「ウインクしよう」では手を叩いてウインクしてみたり、「手を振ろう」ではぶらぶらと手を振ってみたり、「万歳しよう」ではガハハハと大笑い。参加者とは別に、同じ部屋の中で談笑していた高齢者たちも、この声を聞いて一緒に歌ったり笑ったりしていた。

終了後、職員を交えての振り返りの会では、次に試してみたいワークなどを確認。職員からは「ミラーと歌がとて

も楽しそうだった」「『分からないわよ～』と言っていた人が、いざ本番になるとよく理解して楽しんでた。その人の発言だけでは気付けなかった理解力と高い集中力を知ることができた」「自分たちが思っている以上に、目が見えたり、体が動かしたり、声を出すことができることを知ることができた」という感想が。普段あまり自分から何かを発信することがない男性が、ネームゲームにしっかり参加し、大きな声で名前を呼んでいてびっくりしたという話も。参加者たちが普段できないことにチャレンジし、職員にとっても高齢者に内在した力を発見する機会となっているようだ。

絶え間なく笑顔があるワークショップ

11月3日、今年度最後のワークショップ。参加者は、東村山市内で暮らす、地域の高齢者の方々。参加者 14名、講師 1名、アシスタント2名、施設職員が5名。受付で「前回楽



マイムで表現。チームで協働作業することで交流が生まれた。

しかつたのでまた来ました」と挨拶する参加者もいて、リピーターも多い。前回参加したら楽しかったので、今度は仲間を誘ってきたという人も。

まずはウォーミングアップの呼吸。途中、声を出し自分の震える声帯を触ったり、深呼吸の途中で目玉だけ動かしてみたりと、体をじっくりと意識させる動きが入る。参加者たちは普段は意識しないで使っている体を意識し、そこには発見もあったようで、驚きの表情を見せていた。「目を意識しすぎて息を止めないでくださいね！」など、合間、合間に講師からユーモアのある一言が入ると、ワッと笑いも起きていた。

次にペアをつくり、二人向き合って「1」「2」「3」とお互いに数字を順番に言うワーク。続けて、声を出すのではなく、1は手を交差、2はピース、3は手を上げるなどパリエーションもつけていく。

「ミラー」では音に合わせて2組ずつ発表。「ダンスみたいね」という女性がいたり、ほかの人たちの動きも楽しんでいる様子だ。講師も「素晴らしい動きが生まれていました」「相手に合わせるが必要なワーク。みなさんきちんと動きを追って、『やりたくない』ことがないのは素晴らしい」と、良いところを伝えていく。

5～6人の4チームに分かれ、「年の瀬」をテーマに動きをつくり、ほかのグループと当てっこをするワーク。それぞれが「クリスマス」「大晦日」「お正月」「雪合戦」などを体の表現だけで見せ、当たると歓声が上がったり。グループ作業は大変だったようだが、みんな積極的に意見を交わし、夢中になって作りあげていた。

最後は《幸せなら手をたたこう》を全員で合唱。お隣と手を合わせたり、肩を叩いたり、バンザイをしたり、ガハハハと声を出したり……終始、絶え間なく笑顔があるワークショップだった。

終了後、職員を交えた振り返りの会。講師は「初年度よりも空気ができており、いろいろなことを試せるようになった」と言い、「リピーターがいるということは、参加するたびに新鮮さを感じてもらうために、変化をつけていかなくてはいけない。新しいことを加えて、反応を見ながらプログラムを考えていきたい」と語る。続けて「体の状態が違う人たちに、どう一緒にやってもらうかを考えたい。今日は杖の人も立ってくれて驚いた」と言えば、職員も「雰囲気を感じて、自分の中から湧き出てくる力を出してくれる機会になっている」と同意していた。ほかにも「呼吸法がよかった。みなさん、『なかなかこういうことはやらないので面白い』と話していた」「楽しそうにやっていて嬉しい。プログラムの運びがお上手なので、みなさんが元気に明るく動いてくれる。無理矢理感がないという感想をいただいています」という意見も。

超高齢社会に応答し、心を豊かにする

劇団朋友の講師による生きる力を育むワークショップは、対象者に応じてきめ細かくプログラムを組み、一つひとつのワークも効果を考慮。この高齢者向けのワークショップでは「やらされている、あるいは子どものお遊びをやらされてるような感覚を与えないよう、高齢者の方たちのプライドを傷つけないよう気をつけている」そうだ。プログラムを進める劇団員とは別に見学者も同行。客観的な視座としてテンショングラフを記入し、それぞれのワークの効果を精査もしている。講師は「役者だからこそできるワーク、手段を意識している」と話す。リードしていくのは役者たち。参加者にとって日常生活の場が、生き活きとした別空間に変わっていったのは、役者の表現力によ

るものかも知れない（同劇団のワークショップの背景にあるドラマ教育 [DIE] についてはP16も参照）。

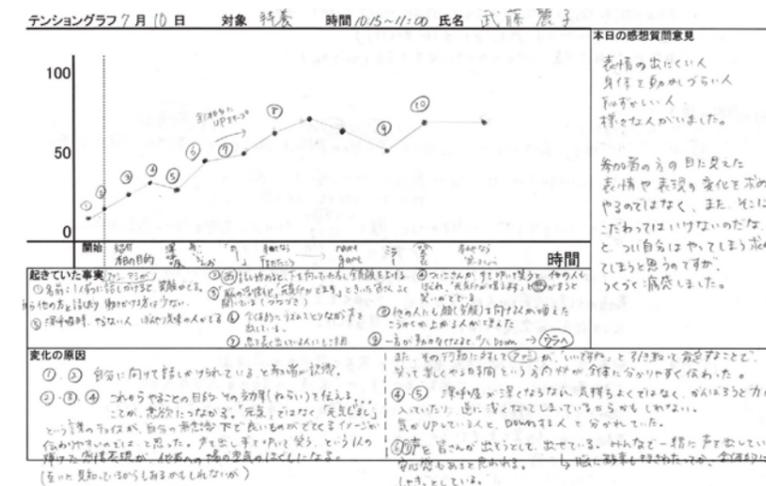
参加者が発表会形式で全員の前で動きをやってみせる時間が随所に入れ込まれており、講師にこの理由を聞くと、「シアターゲームを『楽しんでおしまい』ではなく、参加者たちのクリエイティビティーを刺激し、『こういう表現があるのか』『私もこうやってみればよかった!』と思ってもらうため」と話す。ただ楽しく動くだけではなく、自己発見、挑戦も生まれている。

また、人と一緒に取り組むグループワークにも意味があるという。「他者を理解し、自分から何かを発するためには、クリエイティビティー（創造力）とイマジネーション（想像力）が不可欠です。発表にグループワークを加えることで、受け入れる、自分の想いを伝えるという、コミュニケーション力を高めることも大きな狙いの一つ。ワークで楽しんでもらいながら、『私も認めてもらえた』という自己肯定感につながればと思っています」

アシスタントたちもよく参加者たちの様子を見ており、進行に遅れている人や戸惑っている人にも敏感かつ柔軟

に反応し、積極的に優しく声をかけていた。「面白いですね」「いいですね」といった声かけからは参加者たちの自己肯定感も生まれるだろう。この日は施設の職員が7名。ワークショップを続けるうちに、職員の参加人数も増えてきているという。日々の労働に忙しい施設職員たちも、高齢者たちが日常的な場面では見せない表情や動きを発見し、その可能性を見出している。

近い未来、超高齢社会に突入する日本。医療、福祉などさまざまな面からの対処とともに、高齢者の心に健やかさをもたらす芸術の役割も求められるだろう。人は年齢を重ねていくと生活が単調となっていくが、「寝る」「食べる」だけの繰り返しは孤独で味気なく、「生きている」とは感じられないだろう。人と集まって、動いて、声を出して、笑い合う。自分の老いた体に寄り添ってくれて、自然とコミュニケーションが生まれるこのワークショップには、多くの高齢者が突き当たるであろう課題一体だけではなく、どう心も健やかに生きるか—にもアプローチできるアイデアが詰まっていた。



「テンショングラフ」見学者が、参加者の変化やワーク中のテンションを客観的にとらえ記録している。

コミュニケーションワークショップ 児童養護施設「杉並学園」

協働団体／社会福祉法人光明会 杉並学園

●対象者：児童養護施設に入所中の子ども（小学校1～6年生）

●講師：水野千夏（俳優／劇団朋友）

●実施期間：2019年7月15日～12月21日（全6回）

●プログラム内容

多様な演劇的手法を取り入れたワークショップで、子どもたちが自由に表現しコミュニケーションの楽しさを体験し、自己受容感や他者理解、コミュニケーション能力の向上を目的とする。施設内で小学校1～6年生を対象に、静止画やインプロなどにグループで取り組む。

元気に多種多様なワークをこなす子どもたち

演劇的要素を使ったコミュニケーションを楽しむ、児童養護施設「杉並学園」でのワークショップ。11月23日の参加者は小学校1年生から6年生までの7名（男子4名、女子3名）で、杉並学園本園の子どもたちだけでなく、周辺にある分園からも参加している。講師は1名、アシスタント1名（いずれも劇団朋友）。ワークショップは対象者に応じて一つひとつのワーク効果を考え、きめ細かくプログラムを設計している（同劇団のワークショップの背景にあるドラマ教育 [DIE] についてはP16を参照）。

子どもたちは、部屋に入ってきた時からあちこち走り回ってとても賑やか。服に貼るテープの名札にはニックネーム（この日、呼んでほしい名前）を書く決まりだが、「本気卍（マジマンジ）」「とけい」など、どれもユニーク。今年度は

この日が5回目、前年から続けて参加している子もいる。

最初は、「今日の気分で名前を言う」でスタート。楽しいのか、雨の日でちょっと元気がないのかなど、声の調子で子どもたちの調子を知る。少し声が小さい男の子に講師が「最初は声が出ないんだよね」と優しく声をかけると照れたように笑っていた。

講師の後ろについて教室内をぐるぐる回り、「ついてこないで」と言われたら答えるゲーム。返答は「ついていく」でも「ついてかない」でもなんでもオーケー、ルールは同じニュアンスで返すこと。「ついてこないで！」が脱力した言い方での「食べないで～」に変化すると、子どもたちは楽しそうにケラケラと笑っていた。

次に一人が箱から紙（色々なワードが書いてある）を引き、自分は見ずにほかの人たちに見せ、ヒントを出してもらいながら引いたワードを当てる「言葉の扉」。例えばワードが「馬」なら、他の子どもたちが「足が4本」「茶色」「干支の7番目」と次々にヒントを出していく。「モデル」には

「衣裳を着て舞台上立つ人」「写真集にも出てる人」といったヒントが出た。腰に手を当てながら気取って歩いてみせる男の子も。とても楽しいようで、全員がわれ先に紙を引きたがっていた。途中、正解の言葉自体を知らなくてつまらなくなってしまう子が離脱したが、すぐ復帰。小さな男の子がわざと正解のワードを言ってしまった時には、年上の男の子がお兄さんらしく「それをやったらつまんない」と注意する場面もあり、大人が介入せず子どもたちで解決していた。

絵本「ソメコとオニ」の読み聞かせが始まると、一気に集中し、静かに聞き入っていた。物語を途中で切り、アシスタントがオニとなり、子どもたちに「はい」「いいえ」で答えられる質問を考えさせる。「5歳ですか」「ソメコと遊んでたんですか?」「ソメコが好きですか」といった色々な質問が上がる。二択になる質問を考えるのは難しいようで、子どもたちは悩みながら進めていた。

引き続き「ソメコとオニ」を使ったワーク。グループをつくり、物語に出てくる岩屋での遊びを考える課題では、遊びのルールも自分たちで考える。話し合いで自分の考え方を広げていく、出た意見を最終的にきちんと取りまとめ

る……などいろいろな能力が試されるが、きちんとリードをとる女の子がいたり、うまく仕上げていた。自分たちがつくったゲームで遊べるというのも楽しい経験。

最後は物語の後半を読み聞かせ。講師が「オニがソメコのお父さんに手紙を書いたとして、それをみんなで書いてみましょう」という課題では絵を描いた子もいて、絵本から自由にイメージを広げていたようだ。物語の人物がどんな生活をし、どうやって遊ぶのか……このワークの目的は、登場人物たちの背景を想像し、人に対する興味や想像力につなげること。豊かなコミュニケーションの土壌にもなるだろう。

子どもたちの様子を見てみると、後半の絵本を使ったワークは夢中になって取り組むが、前半のゲームでは集中力にムラがあり気になった。講師にこの差や、それでもゲームを入れる理由について尋ねると「例えば、児童館でこうしたゲームをやると子どもたちは嬉々として取り組むけれど、ここの子どもたちはこうしたコミュニケーションゲームにあまり乗ってこない。ウォーミングアップの意味もありますが、ルールを守ると面白い、それによってやりとりが生まれると楽しいということを知ってくれたら」と教えてくれた。

ワークショップ後、この日見学していた施設職員も参加しでの振り返り会があった。講師とアシスタント側からは「自主的になってきた」「最初は先生のかげに隠れてた子も、積



3年間参加し、今年卒業の6年生の男の子について講師が「暗い言葉しか使わなかった子だったが、前向きな言葉を選べるようになった」と話す。絵本の読み聞かせに関連した手紙（画像）を書く課題でも「こいつと遊んでやりなさい」という優しい言葉が。この子は親との面談で最後のワークショップに参加できず、講師陣へのお礼の手紙に「参加できなかったことが残念」と綴った。

極的に参加出来てきた」「表情や動きが変わってきた」と回を重ねた成長を感じているよう。施設職員は「課題に答える子たちの表情が、日常生活とは全然違う」と話す。

成長を感じる、1年最後のワークショップ

12月21日、1年間のワークショップ最後の日。参加者は6名（男子3名、女子3名）。この日は親との面会などもあったようで、参加タイミングがバラバラ。講師は1名、アシスタント1名。

ウォーミングアップ後、ペアを組んで対面し、上下左右好きな方向に手を動かし、二人の動きがあったら「イエイ」とハイタッチする「ウーハ!」でスタート。

サークルになり一人（オニ）が「ビビリビ、ビビリバ」と言い終わる前にもう一人が「バ!」と言うゲームでは、みんな大きな声で参加していた。

「彫刻ネーミング」はAとBがポーズ（彫刻）を取り、Cがその二人の彫刻に名前をつけるワーク。「寝てるオヤジ」「女をふんずける男」「どでかいカメラの後ろにいる男」など面白い「彫刻」が次々に生まれていた。

続けてペアでの「ジェスチャーゲーム」。二人でお題のジェスチャーをし、みんなで当てる。最初は声なしだったが、セリフをつけてもいいことになると、演技も加わってお芝居のひと場面のように。「スーパーで取り合いをしているおばさん」などユーモラスな動きも。この日は最初からずっと寝っ転がってあまり参加していなかった小さな女の子も、ここから声を出すようになってきた。体でバスを表現したり、何も無い空間に想像力を広げ、多種多様な場面を嬉しそうに表現する。

「ズカズカ」「ゴロゴロ」「うろうろ」といった「オノマトペ」を体で表現する課題では、講師が「どういう時に使う

言葉かな?」とヒントを出してアシスト。

最後は、3匹の子ネズミを主人公とした絵本「ニャーゴ」を使つての課題。読み聞かせの後、ネズミの名前を「ちゅうのすけ」、ネコの名前を「にゃんのすけ」と決め、ネズミ（あるいはネコ）はどんなキャラクターなのかを考えるワーク。ふせんに「こわがらない」「元気なねずみ」「やんちゃ」「よわむし」など、それぞれが考えた性格を書いてネズミの絵にどんどん貼っていく（ロールオンザウォール）。教室の隅っこに行つて、一生懸命何枚も書いていた女の子もいた。

回を重ね変化する子どもたち

終了後、講師と先生との振り返りでは、「途中で部屋から出ていく子どもがいなくなった」「意見を言えるようになった」「以前は仲の悪かった子たちが協力し合っていた」といった変化を感じる声が聞かれた。施設職員は「気持ちを発散・表現する場として機能している」と話す。

子どもたちの年齢幅が大きく、プログラム設定が難しい印象がある。簡単すぎると6年生は飽きてしまうし、難しいと1年生が付いていけない。ただ、どんなワークも「まずやってみる」という子が必ずいるので、乗り遅れた子ども様子を見ながら最終的には全員が参加できているように感じた。終始テンションが高めで、自分の思ったことを言葉で表現できる年齢ではないので、彼らがどう感じながら参加しているのかを知るの難しい。だが途中、集中が切れてチョロチョロし始めた子ども、途中からはまた戻ってきたりと、話はちゃんと聞いている模様。リードする講師側も無理強いしないので、出入り自由なこの雰囲気は彼らには合っているようだ。

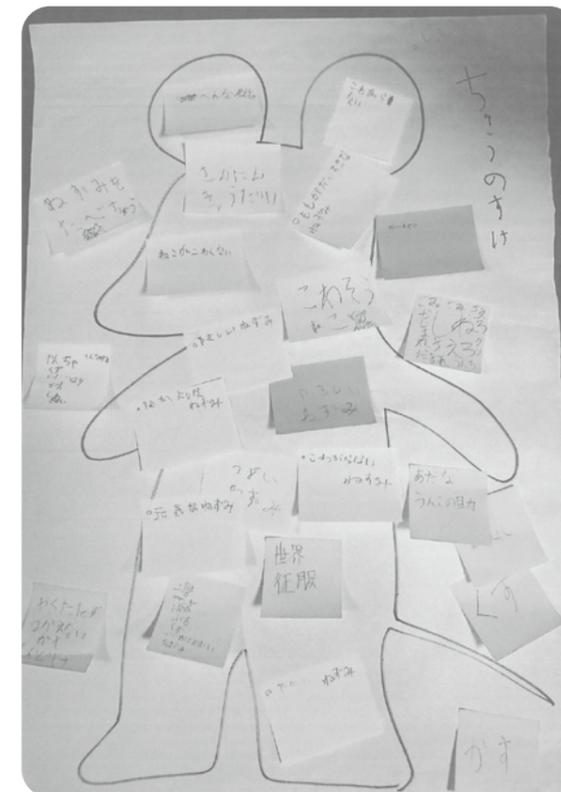
講師にプログラム全体について聞くと「“想像”と“創造”

をどのワークにも入れている」とのこと。「役者だからこそできるワーク、手段を意識している」とも話し、そのポリシーや表現力は、きちんとキャラクターを演じ分ける絵本の読み聞かせでも、しっかり言葉を届けるシアターゲームのルール説明などにも生きている。

今後の課題の一つは、施設の職員がほぼワークショップに関わっていないため、彼らの成長具合を共有したり、日常生活での変化などがプログラムに活かさない点。ここでの連携が進めば、さらに効果的なプログラムづくり、作用の実感が期待できるかもしれない。元気いっぱいに参加している子どもたちの様子を見ているとシリアスな家庭事情は見えてこないが、彼らは、親の事情、あるいは虐待を受けるなどの理由で児童養護施設で生活していると聞く。このワーク

ショップが彼らにどんな影響を与えるのか、データ化は難しく簡単には語れない。が、そういった事情を抱えた彼らが、信頼できる大人と創造的で思いきり子どもらしい時を過ごせるならば、それだけでも尊い時間だと感じた。講師も「たしかに今は、データ化、数値化と言った可視化は難しいところがありますが、確実に笑顔が生まれたり、やたら『死』『殺す』と言わなくなったり、ルールが守れるようになったりという変化があります。ファシリテーターだからこそ、このような直接的変化を感じますし、。ここでのワークが、どこかで彼らの自己肯定につながればと思っています。心に傷のある子たちが自分を否定せず“この自分でいいんだ”と感じてほしい。ここは勝手なことをしても怒られないし、自由な表現の場ですから。また自分を肯定するためには、人を認めないといけないですね。人の話は聞いてあげよう、自分の思いは伝えてみよう、そういう気持ちになってくれたらと思っています」と話す。

演劇は、直接的に社会を変えることはできないが、観た人、その空間を共有した人の心に小さな“カケラ”を残すものである。ここでの体験が、将来どこかの瞬間、彼らの背中を押してくれることを願う。



物語の登場人物を深める「ロールオンザウォール」のワーク。子どもたちが考える主人公の性格がつつぎと出てくる。

コミュニケーションワークショップ 都立石神井特別支援学校

協働団体／東京都立石神井特別支援学校

●**対象者**：特別支援学校に通学している知的障がいのある生徒 中学1、2年生

●**講師**：西海真理（俳優／劇団朋友）

●**実施期間**：2019年12月13日～2020年2月20日（全8回）

●プログラム内容

特別支援学校の授業の一環として、講師が中学1、2年生のクラスに演劇的ワークショップを実施する。多様な演劇的手法を取り入れたワークショップで、ジェスチャーゲームやダンスで子どもたちが自由に表現し、コミュニケーションの楽しさを体験することで、自己受容感と他者とのコミュニケーション能力の向上を目指す。また、学校内での発表事業を講師陣と共に作り上げる。

今年度、第1回目ワークショップ

12月13日、知的障がいのある子どもたちが通学する小・中学部「都立石神井特別支援学校」で、今年度最初の演劇ワークショップが開催された。講師は1名、アシスタント3名（いずれも劇団朋友）。この日は2回のワークショップが実施され（中学1年1組から5組を前半後半に分割）、最初のクラスは、男子中学生11名、先生4名。

まずは全員で手を繋いで大きな円をつくり、音楽に合わせてぐるぐると回ったり、中央に集まったり、思い切り広がったり、声を大きく出してみたり……とウォーミングアップでスタート。

続く「ミラー」は、ペアをつかって対面し、順番に相手の動きを真似してみる課題。初めてのことに少し戸惑いながらも、指示通りに動いてみる子どもたち。最初は手を動か

す程度だったが、座ってみたり、横を向いてみたりと、少しずつ動きにバリエーションが生まれていく。周囲が気になってうまく動けない子もあり、まだ慣れない様子。講師とアシスタントが「いいね」「面白い動きだね」と声をかけると「これでいいのかな？」という感じで、おそろおそろ、ゆっくりと試していた。

次に4チームに分かれ、「太陽」「花」「雨」といったお題の元、グループごとに協力し合って動きを生み出すワーク。最初にアシスタント3人がお手本で「富士山」をつくって見せたのだが、二人が向かい合ってお互いの手を合わせて山をつくり、もう一人が体を「く」の字に曲げて床に寝そべり、湖に映っている山を表現。ただ山のカタチを切り取るのではなく遊び心ある提案が面白い。それに触発されたのか、生徒たちも「太陽」では手をあげて輪になってみたり、「花」では体を揺らして風に花弁がそよぐ様子にしてみたり、「雨」では手をブラブラとさせて雨が降る様子を見せたりと、うまく表現していた。

休憩をはさみ再開。講師が「オリンピック、パラリンピックの種目、何がある？」と生徒たちに問いかけると、陸上、ラグビー、フェンシング、水泳、サッカー、卓球、バレーボール、バスケットボール、リレー、バドミントン、テニス、マラソン、野球、新体操……と、驚くほど次々と回答が上がった。続けざまにどんどん生徒から種目名が出てくるので、生徒の一人が嬉しそうに「びっくり！」と声をあげたりと、このあたりから初日の緊張がほぐれてきたように感じた。ふたつのチームに分かれ、スポーツの種目をグループで表現。ここでもアシスタントが、「卓球」でお手本を見せたのだが、迫真の試合と気合のスマッシュを身体だけで表現。ボールが見えるような演技に、生徒たちも見入っていた。「ラグビー」を選んだチームは最初何をしたらいいのか迷っていたが、アシスタントが「まず動きをやってみようか」「ボールを渡す動きをしてみよう」「練習してみる？」と導いていくと、トライの仕草をしてみたり、ボールをうまくパスする様子を表現したり、ラグビーの動きを身振りで試し始めた。最後、周囲に遅れてなかなか動けなかった子にアシスタントがボールを渡す仕草をすると、受け取った体（てい）でその子が地面にトライする動きを決め、大人たちの拍手を浴びていた。「バドミントン」を選んだチームは、二人で手を繋いでネットを表現してみたりと、工夫を見せた。

部屋の中を自由に歩きながら、「ストップ」「ジャンプ」「手をポン（拍手）」「ビーム」「テケテケテ（と歩く）」など指示通が飛んだらその通りに体を動かす「ストップ＆ゴー」では、ストップで全員がピタッ！と止まることができた。「溶けて！」という指示にも、全員が嬉しそうに体の力を抜いてグニャグニャになるなど、想像力を使う動きにも挑戦していた。

最後は手を繋いで大きな円をつくり、みんなで体を反らせ

てみたり。ここで、約1時間、最初のクラスのワークショップが終わった。

個性が違うクラスに柔軟に対応

後半のグループは、女子を含む中学生15名、先生6名、実習生1名。部屋に入るのに躊躇する子もいたが、女の子たちがグループで固まって遊んでいたりと、始まる前から和気あいあいとした雰囲気。みんなで手を繋いで円をつくり、自分の名前を言い、続けてその名前を全員で大声で言ってみようというワークでは、自分の名前が呼ばれると恥ずかしそうな笑顔を見せていた。

「ミラー」でも、すぐに言われた通りに試してみる子が多く、両手をバンザイして手をパチンとたたくなど、動きのバリエーションも豊富。一拍遅れながらもじっくりと相手の動きを追ってみる集中力の高い子もいる。

4チームに分かれ、「太陽」「花」「雨」を表現する課題では、花の形にした手を頭の上に乗せてみたり、「犬」ではクンクン鳴きながら四つ這いで走ってみたり、ちょっと



講師の動きを真似て身体を動かす生徒たち。

ひねった動きが生まれていた。「仲良しの猫」というお題では二人の子どもがじゃれあってみたり、「親子の猿」では、一人がもう一人の背中に乗ったり、「ウキ〜」と声を出したりと、楽しそう。ただの動物の名前ではなく、「仲良しの」「親子の」と言葉を足したことで、指示をしなくてもペアの動きになっていた。こちらのクラスはこの課題の反応がよく、お題も多め。

「オリンピック、パラリンピックの種目」を聞くと、前クラス同様、たくさん種目名が上がった。パラリンピックの正式種目ボッチャや、応援ソングである《パブリカ》といった広がりある回答も出て、出尽くしたあたりでは「もうない!」と大きな声を出す子どもも。とても積極的に全員が回答していた。続けて、3つのチームに分かれ、種目をグループで表現する課題。「サッカー」チームはドリブルも上手に表現し、ボールをキックする動き、パスやゴールはもちろん、ガッツポーズまでやっていた。「ラグビー」チームは、教室の空間を大きく使って、ラグビーの試合を表現。最後の「ラグビー」女子チームでは、動けずに座ってしまった子に、アシスタントが「トライしてみようか」と声を掛けると、戸惑いながらもトライの仕草ができた。

片付けが終わって校舎を出る際、廊下で先ほどの子どもたちとすれ違おうと、笑顔で手を振ってくれた。

4年間で積み重ねた、 講師と学校のコミュニケーション

ワークショップの終了後、講師とアシスタントたちによる振り返りの会に参加した。本プログラムの背景には、講師陣が実施してきたドラマ教育(Drama in Education : DIE)があり、講師としてリーダーシップを取る西海真理氏

は2005年度文化庁在外研修員として渡英し、ドラマ教育を学んだ。アシスタントたちもこのプログラムを西海氏から学び、定期的に勉強会も開いている。

今年4年目を迎える「都立石神井特別支援学校」でのワークショップだが、初年度の担当教師が西海氏のエデュケーションワークショップを受講し、同学校でのワークショップの橋渡し役をしている。プログラムについては担任教師と事前に何度もやり取りをし、生徒たちの状況を聞きながら取り組み、情報を共有。終了後は教師へのアンケートも実施し、次回ワークショップの参考にしている。生徒たちの安全確保のため複数の教師の参加が不可欠なワークショップだけに、プログラムの共有は有効だ。この日、オリンピックの種目を聞くと、両クラスともたくさんの種目名が上がったのが印象的。教師から授業でオリパラを勉強したと聞いた講師が、このお題を組み込んだ。知識のあるテーマが入ると、スタート時は緊張気味だった生徒たちの表情が、ぐっと和らいだように感じた。こうしたことも、4年継続してきたことで生まれた、講師と学校の連携プレーかもしれない。生徒たちにアンケートを取るのが不可能で、彼らの生の声をすくいあげることが難しいワークショップなので、こうした双方の綿密なコミュニケーションが今後の発展へのキーとなる。

ワークショップ中、さまざまな音のバリエーションを使って進めていたのも印象的。西海氏に聞くと、大音量がダメな子もいるので注意が必要だが、彼らには音楽を使った課題が効果的とのこと。今年1年生は2回のワークショップが実施され、1回目はスポーツを身体で表現することを体験。2回目は詩からイメージする動きをする/詩を読む人に分かれて全員で一つの詩を立体的に表現し、2回で大きな目標に向かうようにプログラ

ムを設計した。

両クラスを通して見ると、ほぼ同じ内容でありながらも、クラスの個性が全く違うと分かった。前半のクラスは、最初は固く動きも小さかったが、だんだんと緊張がほぐれていった印象。後半のクラスは不思議と最初からワクワクした雰囲気があり、楽しんでいるような空気感があった。講師たちも反応がある課題のバリエーションを増やしたりと、子どもたちの個性を見ながら、柔軟性ある対応をしていた。流れに乗れない子、動けない子には「～してみたら?」と優しく導きながら、その子のできる

範囲の表現を温かく見守るというスタンス。グループでスポーツを身体表現してみるワークでは、周囲に乗り遅れていた子どもが最後にラグビーのトライを任されるなど一つの動きを担い拍手を浴びていた。こうしたワークには、そこにいる全員が何かの役割を与えられ、その人の個性を使って場面を表現していく演劇的な要素が有効に働く気がした。通常の授業とは違う課題に取り組むので、日常生活では発揮されにくい彼らの可能性を発見していけば、このワークショップの意味も深まると思う。

1年生①2019年12月13日(金) 13:00~13:50 13:55~14:45 (生徒26名 先生10名 実習生1名)

目的: 体で表現を楽しむ

1	game	詳細	獲得目的	用意する物
5	staff紹介 今日の目的	想像力、創造力を刺激して、体で表現、協力する楽しさも体験する。	目的明確伝達	
10	輪になって	歩いて移動したり真ん中に集まったり動きを工夫。 →全員の名前・repeat	自己原因性 感覚を持つ	音楽
10	ミラー	2人組で、動く人 (leader)、鏡のように真似する人(follower) →音楽をかけながら半分ずつ発表	受ける、伝える、 体で表現	modeling/ 音楽
10	身体で表す	4チームに別れて、太陽、花、山、風、雨、ウサギ、犬、馬などを 絵で示して、一つを選んで、チームで体で表現→発表	身体で表現 協働	modeling/ 絵
5	オリパラの 種目を 出し合う	「リレー」「卓球」の例を 朋友メンバーが実際に動いてやってみる (modeling) →他にどんな種目があるかみんなを出し合って、それを黒板に書く。	観察	modeling
10	1つを選んで 体で表現	4チームに別れて(先生、アシスタントも含む) 黒板に書かれたスポーツの中から1つを選んで体で表現する→発表	協働、表現を 楽しむ	

講師によるプログラムデザイン

さいたま市若者自立支援ルーム 演劇ワークショップ

協働団体／NPO法人さいたまユースサポートネット、彩の国さいたま芸術劇場

●対象者：さいたま市若者自立支援ルームの利用者（15～30代）

●講師：板倉 哲、本間理恵（俳優／青年劇場）

●実施期間：2019年5月22日～12月15日（全17回）

●プログラム内容

「若者自立支援ルーム」に集まっている中高生から30代の若者は、ひきこもり、虐待、不登校、貧困など一人一人別々の課題を抱えている。社会的に孤立している青少年に、月に2回演劇ワークショップを行い、コミュニケーションを培いながら、演劇を通して表現することにもチャレンジし自立への後押しの一つにする。今年度は彩の国さいたま芸術劇場と協働し、「劇場体験ツアー」に参加。

遊び感覚で楽しめる演劇ワークショップ

不登校、引きこもり、孤立など、さまざまな「生きづらさ」を抱えた若者へ支援を行う「さいたま市若者自立支援ルーム」で開催された1年間の演劇ワークショップ、今年度9回目のクラス（9月25日）。この日の参加者はスタート時3人だったが、入退室自由なので、全体を通して約10名ほどの若者が参加した。講師1人、アシスタント2人（いずれも青年劇場）。

最初は、手を叩き、自分で決めたニックネームを言う「ハンドクラップゲーム」でスタート。好みのゲームではないのか、自分が失敗するとゲームを止めてしまうプレッシャーなのか、「終わったらまたくる」と始まる前に抜けてしまう参加者も。そんな中、部屋に残った若者たちに講師が「リズム感がいい」「集中できたね」「頭と体の動

き、先への予測、全部を同時にやるから、演技にも繋がるんだよ」と積極的に声をかけながら進行し、やる気を削がないよう細やかに気遣いしていた。だんだんとスピードアップしたりと難易度を上げていき、バリエーションをつけていく。

次に、ワークショップ用にコンパクトにまとめた既成戯曲を、初見で「読み合わせ」した。部屋に顔を出して「読み合わせが始まったら声かけて」と言う若者もいたので、こちらを楽しみにしている子どもも多いようだ。始まると人数がぐっと増えた。繰り返すたびに講師が「この役やってみない？」と配役を変えていく。徐々に「○○の役やってみない！」と希望が出てきたりと、参加者たちも意欲的。返すたびにリズムもアップし、ちゃんと役に合った声を見つけ、調子も変え、創意工夫をしているのも分かる。ちょっとユーモラスに演じてみたり、演技手によって全く言い方や役作りが変化していくのも楽しらしく、繰り返すうちに台詞も活き活きとし、ト書きもきちんと読んで声で表現する子

もいる。「学園祭でこういうのやったから懐かしい～」と笑顔を見せる子どももおり、遊び感覚の中で“演劇の楽しさ”がダイレクトに伝わっていると感じた。使用した戯曲は10代の子どもたちの会話劇なので、若い彼らが演じるととてもリアル。コミカルなやり取りを切り取ったもので分かりやすく、途中何度も笑い声が起こった。その楽しそうな声に誘われるように、部屋の外にいた子どもがドアの外から覗いていたり、アシスタントが「くる？」と声をかけると、読み合わせには参加しないけれど、部屋の隅で体育座りをして、ずっと聞いている男の子の姿も。読み合わせが1回終わるたびに感想を話し合うのだが、文字だけの世界を脳内で立体的に色々と考えながら取り組み、集中して楽しんでいることが分かった。彼らの声の出し方、演技のスタイルから予測するに、アニメの声優的なものがイメージなのかもしれない。日常的に慣れ親しんでいる世界に引き寄せて、面白そうに色々な声を出していた。

最後は、毎年12月に行われるクリスマス発表会の話し合い。芝居を上演することに前のめりで、戯曲も書いているという子が「自主稽古も必要」と提言するなど真剣な様子も見えた。

全体を振り返ると、シアターゲームに消極的だった子が、読み合わせだと実際に楽しそうに参加していたのが印象的。コミュニケーションが苦手な子ども、フィクション／演劇（役）というフィルターが挟まると、輪の中に比較的抵抗感がなく入っていただけると感じた。

参加者たちの達成感を感じた クリスマス発表会

12月25日に開催された同ルームのクリスマス発表会では、ワークショップ参加者たちによるステージ発表があった。演目は映像作品『聖夜の来訪者』。脚本・監督など含め裏方・表方ともに参加者たちが務め、映像に合わせ、生で声を当てていく。参加者たちはパーテーションの向こうで声を出しており、観客から見えるのはスクリーンのみ。誰がどの役の声をやっているか上映中は分からなかった



円になって読み合わせ。
役に応じて声色を変えたり積極的に取り組んでいた。

が、終演後、舞台上に並んで堂々とあいさつをした時に、彼らの達成感を感じる晴れやかな表情を見ることができた。クリスマス会全体の司会進行をスタッフとともに担ったのはワークショップ参加者の一人。1年間どういった活動をしてきたのかも軽やかに説明し、大変にスムーズで達者な進行。ダンスや、ラグビーW杯で話題となったハカを披露する子や、合唱、作品展示などもあり、利用者とその家族、ルーム職員、ボランティアスタッフたちのアットホームな雰囲気の中、のびのびと表現活動をする様子が見られた。

センター施設長に聞く ワークショップの手応え

演劇ワークショップにも参加し、プログラムの中心に立っている施設長に話を聞いた。

今回、クリスマス発表会の来場者約40名がアンケートにご回答くださいました。そこに寄せられた感想の多くは「これまでのクリスマス会よりも、作品のクオリティーが高い」「楽しそうに参加していたし、やる気が感じられた」というもの。私から見ても、演者たちの向上心も高く、かなり真面目に楽しく取り組んでいた印象があります。今回、司会をしていた一人は大きな達成感を感じていて、「人前に入る自信が出た、またこういう機会があればやりたい」と話しています。親御さんが観に来て「褒めてもらえた」と笑顔を見せた利用者もいましたし、「就職活動を始めことにした」とも話していて、ここでの活動の影響もあったな

ら、嬉しいと思っています。

もちろん、全員が100%満足しているわけではなく、中には「自分もっとできたはずだ」という悔しさを口にしたり、配役に不満を漏らす方もいたり、発表会の前には、精神的な不安を訴えた方もいました。そういうこともあり、発表会当日も全員が出席するか見えない状態でしたので、映像に声をあてるという、誰が休んでも成立できるスタイルにし、参加者のプレッシャーを軽減しました。

人と向き合うこと、自分と向き合うのが苦手な方が多いので、人と合わせなくてはいけない演劇は、現実と向き合う機会になっていると思います。集団性が求められるので、相当なエネルギーを使う経験、社会に出る訓練になっているでしょう。



クリスマス会で発表した映像作品『聖者の来訪者』。
参加者は右奥のパーテーション裏で台詞をあてていた。

このワークショップは今回で3年目。2年目から参加者のオリジナル脚本になったのですが、「自分たちはこうやりたい」という声も出るようになり、意欲も出てきました。役者として出演することに抵抗がある方も、「小道具ならできる」など、自分ができることを探して、何らかの形で参加しようとしてくれています。できること、できないことをきちんと言えるようになったのも、3年目になって、やっと確立できたことのような気がします。

初めてルームに来た時は、とても冗談なんて言えるような性格に見えなかったのに、ちょっと面白いニックネームを名乗って笑わせられるようになったり。このワークショップは誰でも受け入れる温かい雰囲気なので、彼らがのびのびと表現できる居場所になって

いると感じています。参加を無理強いするところがないですし、自由に入退室できて、ちょっと覗くだけでもいいし、見学だけでもいい。「とにかく楽しもう」という雰囲気作りが今年度は成功した気がします。クリスマス発表会を観て、「来年は参加したい」という方もいました。彼らにとっては、ワークショップを開催している部屋に一步入ることに勇気がいるんです。中で何をしているのかちらっと覗いたり、時々見学したり、発表会を観たり、少しずつステップを踏んで、いつか参加してくれたらと思っています。

演劇には、自分ではないキャラクターを演じることによって、自分の内面が表出される仕掛けが用意されています。人との交流が苦手だったり、不安だったり、過去のつまづき体験が人との対話の邪魔をしたり……表現することに怖気付いている人が、楽しく自分を出せて、それを認めてもらえる。それがこの演劇ワークショップの醍醐味だと思います。

劇場の舞台裏を見学できる、彩の国さいたま芸術劇場の「劇場体験ツアー」は、彼らにとって得難い思い出になったと思います（8月に開催）。ツアーの最後に「劇場マスター認定式」が行われて一人ひとりに賞状が渡されたのですが、みんなとても嬉しそうでしたね。見たこともない表情が見られました。両手を広げてロビーを走り回り、小躍りする方もいて、今後の力になる体験だったと思います。

若者演劇ワークショップ in 東京

協働団体／日本労者協同組合ワーカーズコープ連合会、板橋区立文化会館

●対象者：現在就職・就学していない青年

●講師：佐藤文雄（俳優／劇団銅鑼）

●実施期間：2019年10月29日～12月23日（全21回）

●プログラム内容

仲間と共に舞台を作り上げる体験を通して、若年無業者やひきこもりの若者たちに信頼感や自己肯定感を土台とする自己表現力を培ってもらい社会参加へと繋げる。若者自立支援団体等を通じて募集を行い、書類選考と面談で参加者を決定。ストレッチやシアターゲームなどコミュニケーションを図る内容のワークショップを行い、後半は参加者の希望を尊重しながら作品の発表を行う。

緊張を解きほぐし、 信頼関係をつくるワークショップ初日

10月29日、全21日間開催される「若者演劇ワークショップ in 東京」初日。参加者5名（男性2名、女性3名）、講師1名、アシスタント2名、コーディネーター1名（いずれも銅鑼）、ワーカーズコープ（労働者協同組合）職員1名で、大山にある板橋区立文化会館リハーサル室を利用して開催された（参加者は、同文化会館の広報誌での告知、自立支援団体へのチラシ配布、都内数カ所のサポートステーションでのデモワークショップ開催などで募集）。講師も含め全員が本名ではなく、自分で決めたニックネームをビニールテープにサインペンで書き、服に貼って準備完了。初日の目標は初対面の緊張を解きほぐすこと、信頼関係をつくることだ。

最初は全員がイスに着席し、アシスタントから導入として「演劇のいいところ」についての話があった。演劇は一人では出来ない、一人芝居でも音響や制作など裏方も必要で、もちろん観客も必要である。そこにコミュニケーションが生まれ、いろんな人の力が集結する……と解説。

次に、演劇は役者各々で解釈が違うもので、正解は無数にあるという話。ワークショップを進める中でルールを間違えてもいいし、失敗するのも大歓迎で、「こうしないといけない」という事はないし、時に“適当”になることも大事である。失敗しても「Good Job!」だと気軽に捉えて「積極的に間違えてください」と話し、参加者たちをリラックスさせた。

続けて、自分の身体と心の安全を守ること、腰が痛い、足が痛いなど問題がある人は、無理しないでほしい、つらい気持ちになった時は、部屋に用意してあるパーテーションの中へ入ってもオーケーというルール説明がされた。

ストレッチで体を温め、いよいよシアターゲームスター

ト。一人ひとりが手を上げながら名乗る「名前ゲーム」や、相手が負けるように（あるいは勝つように）後出しじゃんけんで反応していく「じゃんけんゲーム」。続く「フルーツバスケット」は、「本が好きの人」「パン派の人」「映画が好きの人」など参加者のパーソナルな部分が見えてくるようなお題にアレンジ。

次はペアでの作業。ニックネームの由来、出身地、好きな＆嫌いな食べ物、趣味などをお互いに話し合い、相手にインタビューしたことを他己紹介形式で発表する。それに対してさらにみんなで質問。ラーメン店めぐり、音楽鑑賞、登山、映画鑑賞……最初は全く知らなかった者同士の間にも、「そういうことが好きなんだ～」と会話が生まれ、共通点が見つかれば質問も増え、話が弾む。質問を考えることは、相手への想像力につながりそうだ。ここで午前の部が終了。1時間の昼休憩に入った。

休憩中、部屋でお昼を食べていた参加者に、午前中の感想を聞いた。「ストレッチは気持ちよかった」「体がほぐれた」「あがり症だからみんなの前で話をするのは不安だった」「他己紹介のために相手に聞いて面白いと思って喋ろうと思ったことが、緊張で抜けてしまった」「人それぞれ、新しい面を知ることは楽しい嬉しい」など、多種多

様な感想が出た。

後半は、ふた手のグループに分かれて歌う「歌ゲーム（Shared song）」で開始。指揮者役を一人決め、《カエルの歌》《咲いた咲いた》などよく知られる歌のワンフレーズを順々に、指揮者に指された人が声に出して歌うゲームだ。

次はペアで、一人が目をつぶり、もう一人が後ろから両肩に手を置き、前進させる「誘導ゲーム」。言葉はなしで、後ろの人が肩に置いた手の掴み方で「進め」「止まれ」をコントロールしていく。「こうしたらいい」と改良点を話し合う人もいて、真剣な様子。そのあと全員で感じたことを話し合うと「耳がよくなった気がして、感覚が研ぎ澄まされている感覚がある」「心が通じ合っている感じ」「責任がある感じ」「相手への信頼がわく」「お任せ感が生まれる」など色々な感想が出た。そのあと同じゲームを「右へ45度」「真っ直ぐ」など言葉での誘導で再度試す。

続いて、部屋の左右に分かれ、目をつぶったパートナーを動物の鳴き声で呼ぶ「誘導ゲーム」。目をつぶった人は、相手の声を聞き分け、その方向に恐る恐る歩いていく。このゲームを受けて感じたことを話し合うと、「だんだんと相手の声の調子に分かってくる」「パートナーにた



成果発表『グレイス商店街の奇跡』を上演。参加者全員で話し合いをしながら台本を完成させた。

どり着くと嬉しい」「相手の手の感覚が分かってきた」と、短時間で少しずつ距離感が縮まっていることが分かった。

続いてペアで「彫刻ゲーム」。一人が彫刻家で、パートナーを粘土に見立て、人形を動かすようにポーズさせていくゲームだ。「スポーツ」といったお題なら、ラグビー、野球、フィギュアスケートなど各々が好きなスポーツのポーズを相手にさせていく。次に数人のグループになって「食欲」というお題が出ると、寿司屋や芋掘りなど、想像力を使った集団で形作るポーズが生まれた。

最後は今日の振り返り。参加者からは「時間が経つのが早い」「緊張していたけれど、だんだん楽しめた」「人の発想も楽しめた」といった感想が語られ、ウォームアップ的なワークショップ初日が終了した。この日から彼らは演劇表現を体感しながら、一つの舞台をつくりあげていく。

2カ月の成果発表会

12月22日、上板橋駅の近くにある劇団銅鑼のアトリエで、全21日間の「若者演劇ワークショップ in 東京」を経た成果発表、舞台『グレイス商店街の奇跡』が上演された。強欲な老人スクルージが改心し、人生を生きなおすディケンズの小説「クリスマス・キャロル」が劇中劇として差し込まれる作品で、商業ビルの出現で活気を失った商店街の人たちが助け合いながら、グレイス（慈愛）を発見するオリジナル舞台だ。会場は約60名ほどの観客で満席。音響・照明・小道具を始めとする劇団スタッフに支えられながら、約1時間の作品を発表した。カーテンコールでは参加者が「一緒にやってきた仲間だ!」と大きな声で挨拶し「スタッフのみなさんが頑張ってくれました」と涙ぐむ場面も。達成感ある晴れ晴れとした表情が見られた。

終演後、ワーカーズコープの職員に話を聞くと「例年より参加者の年齢層が高く、最初は“我が道を行く”というマイペースな人が多いのかな?という印象でした。でも後半は声を掛け合い、助け合ってチームワークを発揮してくれて、きちんと舞台を成立させてくれた」とのこと。欠席や遅刻もなく、きちんと稽古にも参加し、全員が最後まで参加できたようだ。

観客のアンケートでは「気持ちのこもった素晴らしい演技でした」「自信を持って演じていたと思う」「一生懸命さが伝わってきました」などの感想が寄せられた。今年の参加者の一人が今年は観客として訪れていたようで「去年は役者として舞台に立つ側でしたので、とても新鮮な気持ちで観させていただきました」と回答。終演後、観客と出演者が参加して行われた懇親会でも、「活き活きとしてよかった」「大きなつながりを感じた」と、さまざまな感動が語られた。参加者も「みんなが引っ張ってくれた」「人と話すのが苦手だったけど、いいきっかけとなった」「楽しそうな子がいたなと思ってもらえたら嬉しい」「演劇をやってみたかったから嬉しかった」と、観客に向けて改めて挨拶した。

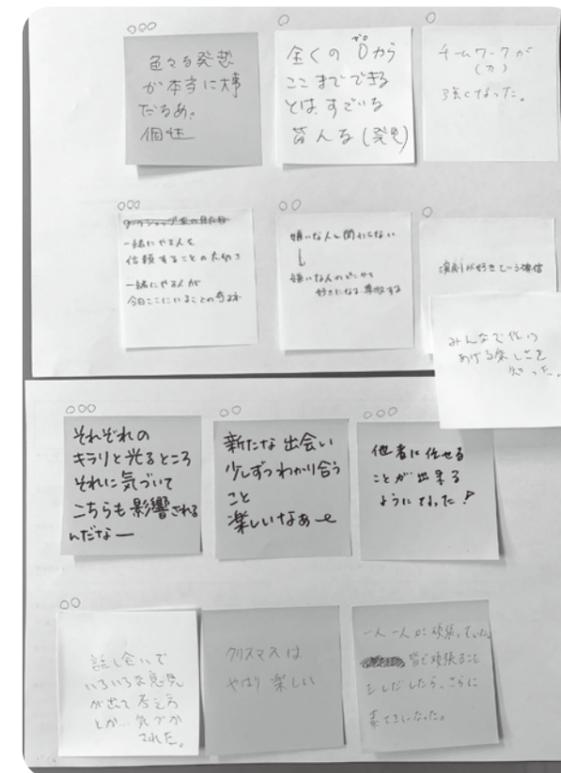
振り返りで知るそれぞれの思い

発表会の翌日には、劇団銅鑼のアトリエで振り返りの会が行われた（参加者の一人は欠席）。早めに着いた参加者たちは昨晩回収されたアンケート用紙を回しながら笑顔で談笑。緊張した表情のワークショップ初日とは違い、すっかり打ち解けた様子で、数日間の創作を経て全員の距離が縮まっていることが伝わってきた。

今回、はじめて演劇に携わった一人の参加者は「演劇に興味があった。趣味で続けようかな」と話し、充実した時

間を過ごしたよう。前日の本番中、出演者のお面が落ちてしまうというハプニングを、共演者が芝居を壊さないよう役として頭に載せ直してあげるという場面があった。そこを指して講師が、「ああいうことはなかなかできない。芝居の神様が降りたと感じた」と語ったのも印象的。学生時代に演劇をしていたという参加者も「舞台上で、誰かがミスった時に共演者が助けたり、ミスがあってもどうにか前に進んだり、そういう瞬間が好き。（やっぱり）演劇っていいなと思った」と語り、集団創作の素晴らしさを再確認していた。劇団側の人たちもいろいろな感想や舞台への思いをざっくばらんに話し、「指導者」ではなく、「仲間」として参加したことが伝わってきた。

こうした機会がなければ出会うこともなかった人たちが、数日間お互いを知り、日常生活とかけ離れたことに挑み、物語に自分の心を映し、心をつなげて舞台をつくりあげるのとはなかなか大変な作業だったと想像する。作品を何にするのか、そもそも発表会を開催するかなど、随時全員で話し合い、エチュード（即興劇）などを通して台本をつくりあげていったとか。本番直前に不安に襲われたと語る参加者もいて、それぞれが事情や思いを抱え、逃げ出さず、真剣な思いで発表会を迎えたことが分かった。演劇は、自己との戦いであり、膨大で綿密なコミュニケーションの積み重ねだ。舞台に生身で立つ恐怖と戦いながら、相手の気持ちを想像し、声を聞き、それに反応し、体と心を動かす……。この経験は参加者にとって、今後、人と対話する上での一つの自信になるのではないだろうか。ワークショップ初日の冒頭でアシスタントの女性から語られた「演劇は一人じゃできない」「演劇には正解が無数にある」という言葉は、21日間を通し、実感を伴っていったに違いない。この「演劇」を「人生」に置き換えれば、彼らが社会への一歩を踏み出すきっかけの一つになるかもしれない。



発表会後の振り返り会。今回のワークショップで自分自身感じた変化や感想を記入した。

在日外国人対象ワークショップ 「にほんごであそぼう」 (兵庫県小野市)

1

概要、プログラム内容

本プログラムは、小野市在住の外国人を対象として実施される外国人支援を目的とした演劇ワークショップである。昨年度より開催しており、2019年度は7月から9月にかけて合計4回開催した。

小野市在住外国人対象ワークショップの概要

対象者	小野市在住の外国人(主な対象は子どもと若者)
活動場所	小野市うるおい交流館エクラ(NPO法人北播磨市民活動支援センター)
プログラム目的	日本語と身体を使った表現活動を通して、外国人にとってふだんの仕事や日常生活では機会が少ないと思われる深く親しいコミュニケーションを体験してもらうことで、地域におけるコミュニティづくりを促進する。また日本の生活になじめない外国人の参加を促し、今後の地域社会への参加へとつなげ、日本人と外国人がいきいきと共生する地域社会の実現をめざす。
プログラム概要	「にほんごであそぼう」日本語を使った自己紹介やゲーム、ワークショップを通して、日本語によるコミュニケーションの体験を促す。
実施時期・期間	2019年7月～9月 全4回(各2時間前後)
協力者	兵庫県立ピッコロ劇団 NPO法人小野市国際交流協会 小野市うるおい交流館エクラ(NPO法人北播磨市民活動支援センター)

2

背景、目的

本演劇ワークショップ(以下、WS)は、小野市うるおい交流館エクラ(NPO法人北播磨市民活動支援センター)と国際交流協会と協働をして小野市周辺在住の外国人(特に、子どもと若者)を対象として実施する。小野市の人口

5万人弱に対して、市内在住の外国人は約870名(25ヶ国の出身者)が居住している。そのうち、国際交流協会が開催する日本語教室の参加者は、小学生～40代の120～130名程度である。

小野市在住外国人にまつわる対象別の課題

外国人の子ども

日本語が苦手なことで、引きこもりになっている子どもがいる。

小野市在住のフィリピン出身の少年(17歳)は、母国では成績優秀だったが、日本語についていけずに引きこもりがちになっている。直近では体調を崩して半年間寝たきりになっていた。

外国人の子どもの保護者

日本語教育の重要性を理解していないことが多く、また理解していたとしても自身も忙しくて、子どものことまで頭がまわらない。

外国人の就業者

会社以外で日本語を話す機会が全くなく、言葉が上達しない。会社では同じ国の出身者とだけ話しており、日本人とはなかなか話せない。

外国人雇用企業

日本人従業員と外国人従業員のコミュニケーションが不足している。

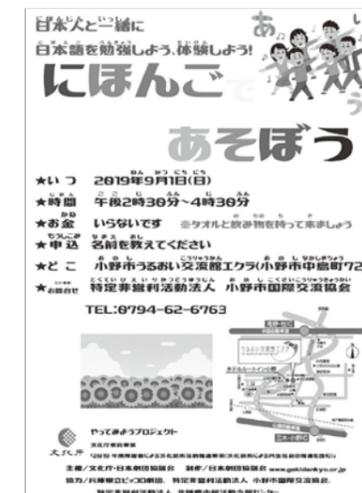
地域の住民(日本人)

ゴミ出し問題は、近所の人とコミュニケーションを取れないために、外国人のせいと誤解している。

行政

技能実習生が日本に対してネガティブなイメージをもって母国に帰ると、そのようなイメージが彼らの国で広まって将来的に日本に来なくなる可能性があるかと危惧している。

上記のような問題の一因として、地域の日本人と外国人がコミュニケーションをとる機会が不足していることが考えられる。ピッコロ劇団、エクラ、国際交流協会は、日本語教室に参加していない人も集まるような場として本ワークショップを企画した。日本語によるワークショップを通して、地域に住む外国人同士や地域住民とコミュニケーションを体験してもらうことで、地域におけるコミュニティづくりを促進する。また日本の生活になじめない外国人の参加を促し、今後の地域社会への参加へとつなげ、日本人と外国人がいきいきと共生する地域社会の実現をめざす。



3

ロジックモデル

各所へのヒアリングを通して、以下のように各ステークホルダーにとっての成果を特定し、その成果に基づいてロジックモデルを組み立てた。尚、2018年度にも同ワークショップのロジックモデルを作成しているが、調査結果を

踏まえて以下のように改変している。

- 重要性が低いアウトカムはロジックモデルから削除した
- これまで国際交流協会につながっていなかった外国人が本ワークショップに参加することも成果と捉えた。

ヒアリングによって特定した各ステークホルダーにとっての成果

外国人参加者（企業の就労者）

- これまで国際交流協会につながっていなかった外国人がつながる。
- また参加者がワークショップの場に安心し、日本語で話す成功体験を得る。それによって、日本語で表現することに自信を持ち、ある程度コミュニケーションが取れるようになる。
- 日本人や別の国の外国人など、職場以外にも話せる人可以る。
- 職場・自宅以外の居場所ができて、日本の地域コミュニティに溶け込む。

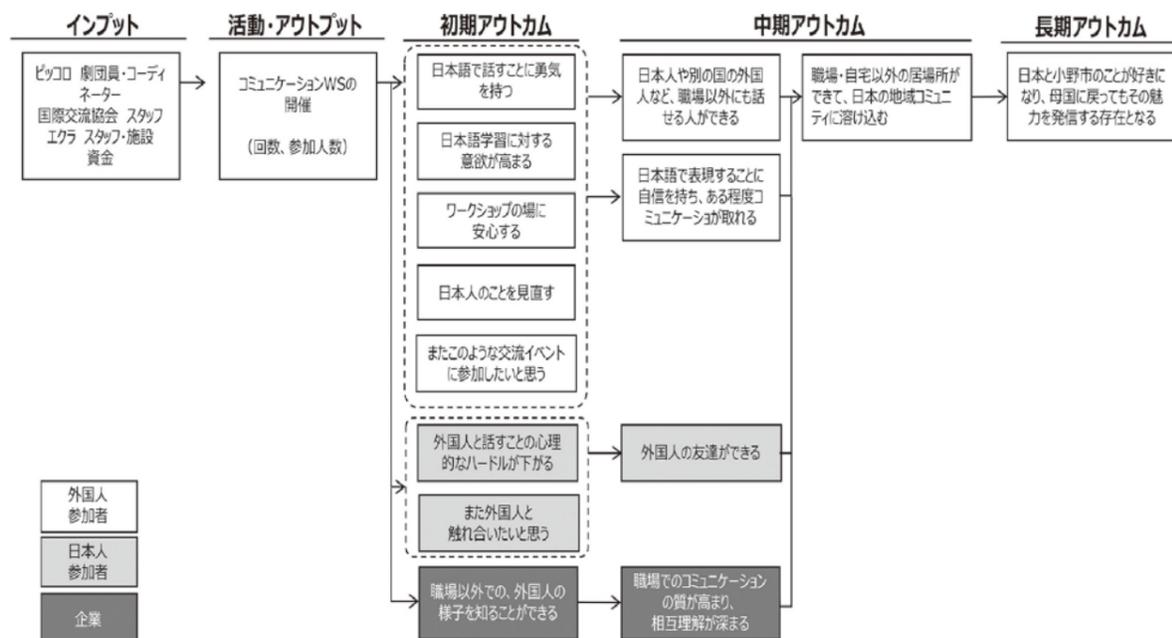
日本人参加者

- 外国人と話すことの心理的なハードルが下がり、また外国人と触れ合いたいと思う。
- 外国人の友達ができる。

協力企業

- 職場以外での、外国人の様子を知ることができる。
- それにより、職場でのコミュニケーションの質が高まり、日本人従業員と外国人従業員の相互理解が深まる。

演劇ワークショップのロジックモデル



4

調査概要

①調査目的

特定した本プログラムの成果を検証するために、ワークショップ参加者の変化の把握を目的として調査を実施する。

②調査方法

以下に調査対象とデータ取得時期、および調査方法を示す。第1回から第4回WS時にデータを取り、国際交流協会、ビックロ、エクラとは終了時に振り返りを行なった。また半年後の2020年1月には中間アウトカムを把握するための追跡調査を行なった。尚、外国人には国際交流協会のスタッフに協力いただきデータを取得している。

調査方法

	WSの小目的	調査のアプローチ	対象者	調査方法
第1回WS	職場以外で安心して外国人と日本人が日本語を使って交流できる場をつくること	参加者のアウトカムを測定する	外国人（企業で働く技能実習生） 日本人	アンケート（全員） インタビュー（一部）
第2回WS		主催者と協力者でセオリーおよびプロセス面の振り返りを行い、次回WSへの学びを抽出する	企業担当者、行政関係者	インタビュー（工場長、総務課、その他）
第3回WS			国際交流協会、エクラ、ビックロ	グループディスカッション
第4回WS	小野市に暮らす外国人と日本人が安心して日本語を使って交流できる場をつくること	基本的には、昨年度と同じスキームで調査を行う（継続調査による比較が可能）	外国人（一般） 日本人（昨年度は無し）	アンケート（全員） インタビュー（一部）
終了時（第4回WS後）		第1～4回WSの運営上の振り返りを行い、学びを抽出する	国際交流協会、エクラ、ビックロ	グループディスカッション
半年後		第1～4回WSの中間アウトカムを測定	外国人	アンケート インタビュー（協力者がいれば）

③調査内容

それぞれの対象者に対して、以下の内容で調査を行なった。

調査内容

対象者	目的	詳細	時期	設問例
外国人	アウトプット調査	出席回数などのアウトプット情報を把握する	毎WS後	出席回数
	アウトカム調査	ロジックモデルに基づいて、どのアウトカムがどのくらい達成されたかを確認する	初期アウトカム：毎WS後 中期アウトカム：追跡調査（2020年1月）	・にほんご、はなせましたか？ ・たのしく、にほんごのべんきょうをできましたか？ ・あんしん、できましたか？ ・せんせいのこと、好きですか？ ・また、さんかしたいですか？
	ニーズ調査	対象者が抱えている課題を把握する	第1回WS時	・日本での生活はどうですか？ ・どんなことに困っていますか？ ・上記に対して、どのような対応をしようと思えますか？ ・国際交流協会のイベントや地域に対してどのようなことを求めますか？
企業	ニーズ調査	工場長、総務課に対して、普段の会社での様子を聞くことで、外国人が抱えているニーズや企業ニーズを把握する	第1回WS時	・会社での生活はどのような様子ですか？ ・彼らは、どのようなことに困っていますか？ ・上記に対して、企業としてどのような対応をしようと思えますか？ ・地域・国際交流協会に対して、求めたいことはありますか？
日本人	アウトカム調査	ロジックモデルに基づいて、どのアウトカムがどのくらい達成されたかを確認する	初期アウトカム：毎WS後	・外国人の方と、日本語で安心してコミュニケーションを取れましたか？ ・ワークショップを楽しみましたか？ ・またこのようなワークショップに参加したいですか？ ・ワークショップを通して、外国人に対するイメージに変化はありましたか？ ・外国の方々の普段の様子を知ることができましたか？
	その他			今後外国人の方達が地域コミュニティに溶け込んでいくために、できることやご意見がありましたら、教えてください。

④測定・分析の結果

以下の内容について、測定・分析の結果を示す。

A) アウトプット・データ

B) 初期アウトカム・データ

C) 中期アウトカム・データ

D) ニーズ調査結果 (外国人、日本人、企業)

A アウトプット・データ

演劇ワークショップの参加人数は、以下のように推移している。

(合計人数は、第1~4回の単純合計のため、人のカウントの重複あり)

アウトプットデータ

回数	参加者数 (合計)	参加者数 (内訳)		外国人参加者のうち、 普段日本後教室を利用している人
		外国人	日本人 (企業含む)	
第1回	44	外国人	36	12
		日本人 (企業含む)	8	-
第2回	14	外国人	13	13
		日本人 (企業含む)	1	-
第3回	30	外国人	19	6
		日本人 (企業含む)	11	-
第4回	54	外国人	33	11
		日本人 (企業含む)	21	-
合計	142	外国人	101	42
		日本人 (企業含む)	41	-

ひらがなを組み合わせる単語をつくる「身体で一文字」のワーク。積極的に手が挙がり、たくさんの単語をつくることができた。



また各回の WS 終わりには参加者 (外国人、日本人) が輪になって、外国人参加者も含めて一人ひとりが日本語で感想を共有した。以下に、その内容を紹介する。

参加者の感想 (第1回、4回WS)

<外国人の感想>

- もっと日本語を上手に勉強するように、この教室に出てください。
- 皆さんと一緒に参加したけど、今日は日本人はいっぱい、楽しかったです。
- 優しくしてくれてありがとうございました。
- 今日はマジ面白かったですね。
- 今日は仲良くなったと思います。
- いろんなことを教えてもらってありがとうございました。
- いろんな国、人に出会って、いろんなゲームができて楽しかった。またやってください。
- はじめてこういう場で交流することができた。
- 楽しかったです、毎週行きたいです。
- このイベント、決して忘れません。
- ベトナム人、フィリピン人、今はいっぱいいるから楽しかったです。
- 皆さん、日本人、楽しい。
- また来年一緒に遊ぼう、もう一回皆さんに会いたいです。
- 今日は最後の日と先生に言われたけど、もっとこのイベントをしてください。

<日本人の感想>

- みんな仲よし、素晴らしかったです。
- いろんな国の方と出会って子供たちにとっても良い経験でした。
- 日本語を使って楽しめた
- 外国の方々が日本語、とても上手だと思いました。もっと小野市を大好きになってください。
- 初対面の人も優しく接してくれた。
- 外国人も日本語がとても上手なので、驚いた。外国のことを知って頑張りたい。
- 今日みたいにいろんな国の方と関わるのははじめてだけど、良い経験になった。

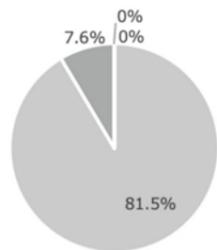
B 初期アウトカム・データ

1) 外国人参加者

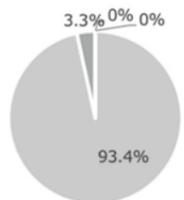
以下に、外国人参加者の初期アウトカムの測定結果（4回分の WS 合計）を示す。初期アウトカム5に対応した5つの設問に対して、大多数が肯定的な内容であった。

初期アウトカムデータ（外国人参加者）

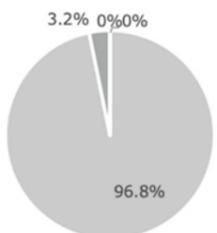
にほんご、はなせましたか？



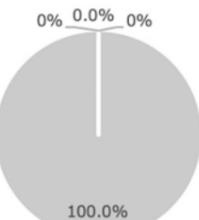
たのしく、にほんごのべんきょうを
できましたか？



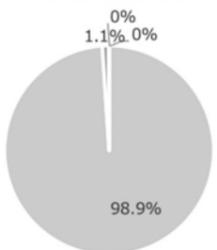
あんしん、できましたか？



せんせいのこと、好きですか？



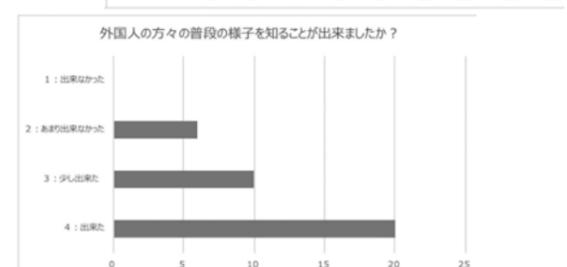
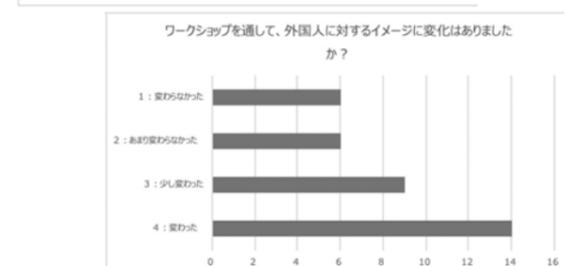
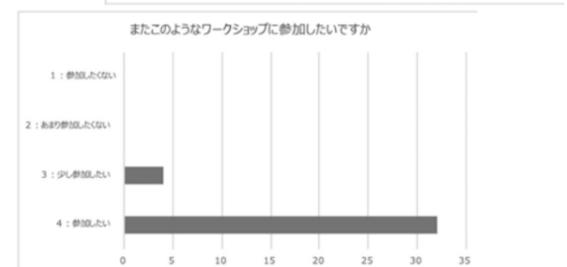
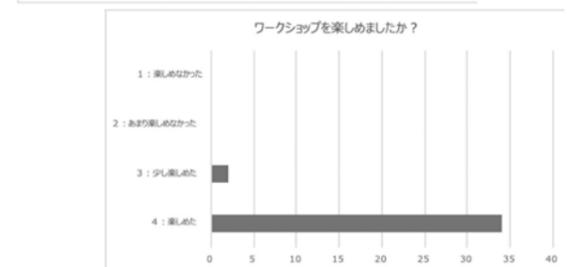
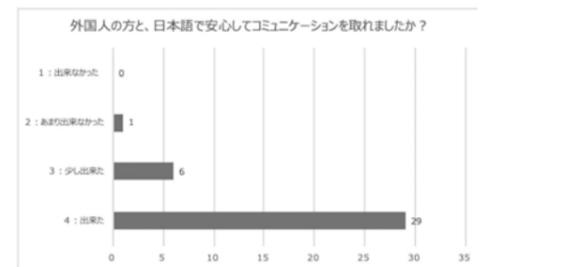
また、さんかしたいですか？



2) 日本人参加者

以下に、日本人参加者の初期アウトカムの測定結果（4回分の WS 合計）を示す。

図表. 演劇ワークショップの初期アウトカムデータ（日本人参加者）



また日本人参加者には、アンケートの自由記述として「今後外国人の方達が地域コミュニティに溶け込んでいくために、できることやご意見などがありましたら、教えてください」と聞いた。以下に、回答結果の抜粋を示す。

外国人が地域コミュニティに溶け込むための意見（日本人参加者）

- 外国人とこのように交流できる場がたくさんあればよいと思います。
- 今回のようなイベントをもっと実施してください。とても楽しく、外国人の方々と交流できて、とても良い経験ができました。
- 自分が思っていたイメージは、もっととつきにくかったり、各国で常識が違うからすごく心配だ、だけど、全く違って、優しい人たちばかりでとても楽しかったです。
- 今回のような外国人と地域住民が参加できるイベントの企画。中学生以上は部活などで忙しく、なかなかイベントに参加できないので、小学生の親子で参加できるようなイベントだと、子供の頃から外国人のいる環境に慣れやすいのでは？
- 外国人の日本語を使う場、日本人と触れ合う場を設ける。例えば、フリートークのサロンを定期的に行い、一般の方にも入ってもらい。外国人同士の横のつながりも広がり、外国人の中で今興味のあること、困っていること、日本と自国の文化の違いなど、日本語教室とは違った、カジュアルな会話を楽しむ会。
- 地域にあるイベント（祭りやサークル活動など）に外国人を積極的に誘って参加してもらいたい
- 地域の日本人の方々に参加し、外国人の方々と交流してもらい、外国人に対する誤解や印象を変えていってもらいたい必要があると思います。子供達は外国人にあまり抵抗はないけど、地域のコミュニティを動かしている 50 代、60 代や子供がいる親世代が外国人と触れ合いを持てる場で気軽に参加しやすいイベント内容（今回の WS のように）を増やしていく必要があるかなと。外国人の方々は、イベントに対してはいつも前向きに参加してくれていると思います。
- このイベントに参加して、「予想以上にこの地域で暮らす外国人が、地元の日本人と交流することを望んでいる」と実感できた。
- 今回のワークショップのように、彼ら彼女らと地域住民が接触できるような機会や場所を積極的に設け、そのことがきっかけになり日本人と外国人或いは外国人同士の間で友人関係や信頼関係が築ければいいと思います。
- 現状の課題は、自分の身近で暮らす外国人に対する日本人の関心の低さに問題があると思いますが、その姿勢は早晚必ず転換を求められる時期がやってくると確信します。



中間アウトカム・データ

以下に、外国人参加者の中期アウトカムの測定結果を示す。これはロジックモデルに示した中期アウトカム「日本人や別の国の外国人など、職場以外にも話せる人ができる」、「日本語で表現することに自信を持ち、ある程度コミュニケーションが取れる」、「職場・自宅以外の居場所ができて、日本の地域コミュニティに溶け込む」に対応するものである。調査対象は、昨年と同WSの参加者5名、および今年の

WS参加者4名の合計9名とした。結果は、今住んでいる場所でなんでも話せる人は平均8.7名、その中で日本人の数は平均4.8名、その中で本WSで知り合った人は平均2.0名であった。中期アウトカムの達成度(4段階中)は、日本語でコミュニケーションをとることの自信は平均3.5、学校や仕事に次の日もいきたいと思う割合は平均3.8、日本や小野市が好きな割合は平均4.0であった。

中期アウトカムデータ

No.	質問	回答	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	あなたのことを教えてください。	年齢:	31	15	26	27	30	27			
		出身国:	ベトナム	ベトナム	ベトナム	ベトナム	イギリス	ニュージーランド			
		在日年数:	6		2	3	2	2			
		お仕事:	組み立て	生徒	建設	食品	odd jobs	ALT			
2	国際交流協会のイベントによく参加しますか?	4:よく参加する 3:ときどき参加する 2:あまり参加しない 1:参加しない	4	4	4	3	3	3	4	4	4
3	今住んでいる場所で、なんでも話せる人は何人いますか?	人	4	4	4	3	8-20	30	4	3	4
	その中で、日本人は何人ですか?	人	4	8	6	3	8-20	15	0	2(会社の人)	4(先生たち)
	その中で、去年のワークショップで出会った人は何人ですか?	人	0	2	0	3	7	5	0	1	0
4	日本語でコミュニケーションとすることに、自信がありますか?	4:ある 3:少しある 2:あまりない 1:ない	4	4	3	3	2	4	4	4	
4b	その理由を教えてください。			自信がたてられるから、会話するのができる。	ちよと恥づかしかったです。	にほんごがわかりますから。	I need to study more Japanese.	everyone is friendly		先生のおかげでたくさん日本語を勉強するから	
5	学校や仕事に次の日もいきたいと思いませんか?	4:思う 3:少し思う 2:あまり思わない 1:思わない	4	3	4	4	4	4	4	4	4
6	日本や小野市のことは、好きですか?	4:好き 3:少し好き 2:あまり好きではない 1:好きではない	4	4	4	4	4	4	4	4	4
7	5、6の理由を教えてください。		しずかです	広くて、いろいろな活動があります。	人がやさしいです。かきょうがきれいです。食べ物がおいしいです。生活は便利です。天気もいいです。	にほんごがすきですから。		lots of friendly people	お祭り、釣りをするところや魚がいっぱいある。たぶん綺麗なお店がある。	生活のために、仕事はきらいだけど	日本語教室があるから
	また困っていること、小野市や国際交流協会にお願いしたいことがあれば、教えてください。		参加しないからわかりません。	自分のいるところをみんなに紹介しました。えるや合流できる機会を思います。	話すことレベルみんなに紹介しました。	参加してみても面白かった。				小野は静か。環境がいい。前は東京だった。	



ニーズ調査結果(外国人、企業)

今後の地域としての外国人支援体制を構築していくために、外国人と企業に対するニーズ調査を行なった。ニーズ調査はインタビュー形式で行い、ワークショップの前後で評価者が外国人3名、企業1社に対してインタビューを行なった。

外国人インタビュー結果

- 困ったことはゴミ出し。サポートして欲しい。
- (日本語教室に求めることは?) 日本文化を勉強したい。
- 日本語がまだわかりませんから、ゴミ出しなど、いろんなルールに困っている。

外国人を雇用する日本企業(ベトナム人工場長)

- 生活では、2つ困っていることがある。1つ目は、ゴミの出し方。生ゴミ、プラスチック、粗大ゴミなど、絵で説明されているが、ルールが細かくてわからない。それが一番大きなトラブルの原因になる。2つ目は、自転車の交通ルールがわからないこと。自転車に乗っていて、どこで止まるかわからない。安全運転できていない。
- 近所から自転車のルールで、会社にクレームがあったことがあるが、「僕の会社はそういう子はいません。ちゃんと教育している」と答えた。自宅-会社間の自転車のルートをきちんと決めて守らせている。ベトナム人だと噂で広がっているが、結局違う国の人だったことが後からわかった。これは、交流がないから起こることである。コミュニケーションが一番大事。
- (何か課題として感じていることはありますか?) リーダーやチームの皆さんがあたたく教えて欲しい。休みの日はゆっくり遊びにいて欲しい。そういう会社が少ない。休みにも会社の日もコミュニケーションして欲しい。日本の国の凄いとこをベトナムに持って帰って、ベトナムに役に立てて欲しい。もちろん仕事以外にも。
- ベトナム人が多くなったので、小野市は責任を感じているのではないかと。市にも温かな気持ちで迎えてもらえるように検討してもらいたい。お互い知り合うことが必要。
- (何か地域への要望はありますか?) 日本語学校をもっと増やして欲しい。小野市には外国人が多い(特に大きな会社では外国人が多い)ので、なるべく日本語学校を連続でやってもらいたい。1週間休むと語学力が落ちてしまう。1日2時間くらいは勉強会をやりたい(できる環境が欲しい)。
- 日本社会に馴染むために、ベトナムにいる時から日本についての教育をしている。ベトナムの学校では、面接対策だけでなく、難しい日本社会のルール(生活上のルール)も教えて欲しい。送り出す前、国にいる時から教えて欲しい。

総括・まとめと今後の展望

① 総括・まとめ

以下の5つの観点で、主要な関係者である国際交流協会、ピッコロ劇団、エクラによる事業の総括を行った。総括の点数は、振り返りの際に5つの観点（課題分析の妥当性、内容の妥当性、実施の適切性・十分性、効果、継続性）について、14名の関係者に「大いに良い」、「ある程度良い」、「ふつう」、「ある程度悪い」、「大いに悪い」の5段階で無記名投票してもらい、結果を集計して算出した。「総括結果」は、算出した「平均点」を四捨五入して5段階のレーティングに当てはめた。

総括結果

No.	総括の視点	総括結果	平均点（5段階）
1	課題分析の妥当性（ニーズ）	ある程度良い	4.1
2	内容の妥当性（セオリー）	ある程度良い	4.3
3	実施の十分性・適切性（プロセス）	ある程度良い	4.3
4	成果・効果（アウトカム）	ある程度良い	4.3
5	継続可能性	大いに良い	4.6

1：課題分析の妥当性（ニーズ）

今年度のWSを開催するにあたり、対象者のニーズの把握をどの程度妥当にできていたのだろうか。総括の結果、「ある程度良い」という結論となった。今年度のWSは昨年の実施経験を踏まえて企画しており、昨年の実施経験を踏まえると、地域に孤立しがちな外国人が各年代に渡って多様におり、外国人同士や日本人との出会い・交流の機会を求めているということであった。今年、その中で企業に勤める外国人が孤立しがちであるという仮説を立てて全4回中3回のWSを企業に就労する外国人と彼らを雇用する企業に声をかける形とした（最後の

1回は昨年同様に誰でも参加できる形式とした）。

日本語教室参加者のニーズについては日頃から国際交流協会が細かく把握しているが、今回対象である企業勤めの外国人と企業側のニーズは不確かということもあり、事前の準備段階で企業を周り、把握する努力をしていた。国際交流協会からは、「企業を回って見て、外国人の現状を知ることができた」というコメントが挙げられた。さらにWS当日も企業担当者や企業で働く外国人へのインタビューを実施し、彼らのニーズ触れることができたことも価値があるだろう。

現在の小野市の外国人労働者は約600名ということであるが、行政の計画では今後1600名までに増やす予定だそうである。企業側もますます多くの外国人を受け入れるにあたり、企業として地域として外国人のニーズを把握していくことがますます必要となるだろう。

2：内容の妥当性（セオリー）

本WSは、対象者のニーズを解消するために適切な内容設計ができていたのだろうか。総括の結果、「ある程度良い」という結論となった。プロジェクト開始時に、昨年の評価結果と国際交流協会、ピッコロ劇団、エクラの3者の協議を踏まえてロジックモデルを更新した。ロジックモデルに描いた長期アウトカム「日本と小野市のことが好きになり、母国に戻ってもその魅力を発信する存在となる」やその手前の中期アウトカム「職場・自宅以外の居場所ができて、日本の地域コミュニティに溶け込む」を実現するため、外国人だけでなく、日本人や企業の変化も必要であり、これらの関係者の変化も含めてセオリーを整理した。

日本人の中期アウトカムは「外国人の友達ができる」、企業の中期アウトカムは「職場でのコミュニケーションの

質が高まり、相互理解が深まる」と定めた。国際交流協会からは、「安心して日本語を使うという点においては、今回のワークショップの内容は難易度においても、ちょうど参加者のレベルにあっていて、みんなが楽しく参加できた」、ピッコロからは「初めに言葉を使わないノンバーバルなワークから、徐々に日本語を使ったワークへシフトしていく本ワークショップは“打ち手の一つとして”有用だと思う」、「日本語を使いながら自然にコミュニケーションがとれ、楽しく作品づくりに取り組んでいた。また、言葉を使わずコミュニケーションをとるメニューでは、国の違いはあれど共に楽しむことができることをより実感することができた」などのコメントが挙げられた。

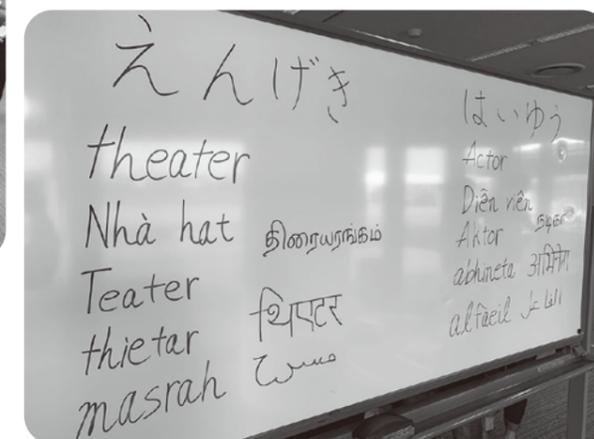
本WSの目的や起こしたい変化（アウトカム）から考えると、WS実施頻度を増やしたり、企業の日本人従業員や地域住民にも参加を促すなど、様々な仕掛けが必要であろう。参加している外国人が地域全体の中の一部であるため、いかに参加の敷居を下げるかといった視点でセオリーを見直すことも必要であろう。



3：実施の適切性・十分性（プロセス）

本WSは、セオリーや実施計画に沿って適切に運営ができていたのだろうか。総括の結果、「ある程度良い」という結論となった。今年度は対象者を企業にまで広げため、募集告知の段階から国際交流協会が行政と連携して企業をリストアップし、17社ほど訪問を行なったことである。企業訪問を行うことで様々な課題が見えてきた。

一例を挙げると、企業への説明資料（本WSに協力してもらった意義等）、協力の提案の仕方、対象企業から日本人従業員の参加を促す工夫の必要性などである。このように企業へアプローチしたことで見えてきた課題や経験値の蓄積、地域での外国人同士や日本人との繋がりを作っていく上での学びが得られたことは事実だろう。また昨年同様に、募集告知時のチラシ作成や動画を用意して興味関心を惹く工夫、当日の参加者へのウエルカムな雰囲気づくりや声かけも素晴らしく、本WSの実施プ



ロセスにおいては3者の連携体制がよく取れて運営されていたと感じる。一方でピッコロからは「主体的な“学びの場”を提供できるようにメニューを組むためには、参加者の“正確”な情報（人数・男女比・年齢・宗教・日本語習熟度・性格等）が必要であり、本年度は十分ではなかった」というコメントも挙げられた。ここは昨年と異なり対象を企業まで広げたことで把握しづらくなったことも要因であろう。

今後企業参加モデルで実施をしていくのであれば、普段国際交流協会と接点が薄い外国人の参加を考慮する必要があるため、情報把握・共有という点で、今後の検討事項となるであろう。

4：成果・効果（アウトカム）

本WSは、どのくらいの効果を挙げたのであろうか。総括の結果、「ある程度良い」という結論となった。複数の関係者からは「成果を測るには早計のように思う」というコメントが挙げられたが、中長期的な成果を自らで定義して、それを達成するための作戦（ロジックモデル）を描き、手前の成果を捉えることは、事業の改善につながるため有用である。ロジックモデルで成果を特定して測定した結果、初期アウトカム測定結果は外国人・日本人ともに全て大変良好な結果であった。中間アウトカムの測定結果（外国人）は昨年のWS参加者も併せてデータを取得し、WS実施の半年から1年後に、本WSで出会ってなんでも話せる日本人の人数は平均2.0人という結果であった。ただしこれは個人差や環境による差が大きいため、全て本WSによる成果とは言えないことに注意が必要である。

関係者の振り返りの中で挙げられた象徴的なエピソードを2点紹介したい。1つ目は、今年のWSすべてに参加

したベトナム人女性（27歳）がWS中にリーダーシップを発揮してくれて、日本の静かな女の子を“バースデーケーキ”（複数人で体を使って表現するワークショップ）の真ん中にするなど、全体を配慮しながら参加者とコミュニケーションをとったということである。

2つ目は、外国人参加者が顔見知りではない別の国の参加者に自分の子どもを預けているというシーンがあったことである。外国人参加者が主体性を発揮して日本人とコミュニケーションをとったり、安心安全の空間や共生の雰囲気が出ている分かりやすいエピソードであると思う。またある外国人は、休憩中に参加者へのお茶配りを手伝ってくれるなど、複数回参加することでの顔なじみ感、コミュニティへの所属感が高まる様子が見受けられた。

ピッコロからは「安心安全な場で、日本語を使うことに楽しんでトライできること、勤務先や地域の日本人と、日本語や身体をつかった表現でコミュニケーションをとれること、その結果、外国人同士、日本人と外国人のコミュニティが活性化することについて、着実に成果があがりつつあることが体感できた」等のコメントが挙げられ、国際交流協会からは「外国人、日本人という枠を超えて、皆が安心して、積極的にワークショップに参加できたことは、国際交流協会が常に目標としている地域における多文化共生の在り方のイメージそのままであり、今後、これを発展させていけたらと思う」といったコメントが挙げられた。

本WSが中長期的に生み出したい成果（中長期アウトカム）を考えると、本WSは単年度事業、単発のイベントという制約があり、そこに至る道のりはまだあるが、高い成果を生むための活動内容の改善も含めて期待したい。

5：継続可能性

本事業の「成果・効果」を生み出していくには継続性を高めることが重要である。本事業は、どれだけ継続的に実施していける可能性があるか。総括の結果、「大いに良い」という結論となった。継続可能性が高まった理由として、国際交流協会は、1点目が外国人を雇用する企業との接点が増えたこと、2点目が地域との接点が増えたこと、3点目が市民につなげることができたことと整理をした。

1点目について、国際交流協会からは「今回のWSの準備として企業を回ることで、小野市の外国人の現状をますます深く知ることができた」というコメントが挙げられた。企業が抱える課題を地域が知り、それを一緒に解決していくような連携体制が進むと、企業の理解が進み外国人がより働きやすくなるであろう。

2点目は、本WSを通してコミュニティセンターの人権担当者、地域防災活動団体、警察官、市議会、行政など、平時のみならず災害等の非常時に相談できるつながりが持てたことである。

3点目は、外国人や国際交流協会に参加しているボランティアのみならず、小野市一般市民や学生とのつながりが持てたことである。日本人参加者にも調査をしたが、「今回のようなイベントをもっと実施してください。とても楽しく、外国人の方々と交流できて、とても良い経験ができました」、「こういった貴重な体験のできるボランティアにまた参加したいです!」などのコメントが多く寄せられた。振り返りの際は、地域の問題点を見つけ、それを解決するきっかけを作り続けるためにも、今後も本WSを継続していかなければならないという認識を確認した。

昨年からの継続実施により、実施主体の連携体制をさらに密に出来たこと、また本事業に関わるステークホルダーが増えたことは継続性を高めることに大きく貢献するであろう。今後、これをどのように発展させ継続していくかが大事となる。

②まとめと今後の展望

本事業は2年目であるが、1年目の実施経験を踏まえて対象や内容を発展させて、高い成果を生み出し、またステークホルダーが増えたことで事業の継続可能性が高まったと言えるであろう。本事業の対象として、今年度は外国人を雇用する企業にまで広げて実施したことで募集から当日の運営まで難易度が上がったが、企業に声がけをして巻き込むプロセスによって企業ニーズの理解が深まったこともひとつの成果であるといえるかもしれない。

しかし、小野市在住の外国人を考えると本WSに来てくれた人は一部であり、参加企業数もごく限られていたため、今後対象者を企業にまで広げるのであれば、企業が参加しやすい立て付けをどのように作るか、また外国人と同じ地域に住む日本人の参加者をどのように増やすかといった視点でセオリーや運営プロセスを見直すことも必要であろう。

今後、企業をはじめ今回のWS実施により関係性が出来たステークホルダーと連携を深めながら、より本質的な課題解決に貢献することを期待したい。

考察

「数字を支えるエピソード」

古賀弥生

- 1 岐阜県立不破高等学校
文学座演劇ワークショップ
- 2 ピッコロ劇団による
在日外国人を対象とした演劇ワークショップ
- 3 日本演劇情動療法協会による
富沢病院における活動
- 4 総合考察

数字を支えるエピソード ～不破高校、エクラ、富沢病院での 演劇の力を活用した取り組みから～

古賀 弥生

(九州産業大学 地域共創学部地域づくり学科 教授／アートサポートふくおか代表)

令和元年度の「やってみようプロジェクト」について、3件の活動の現場を視察する機会を得た。それらの活動の成果については、それぞれにアンケート調査やロジックモデルを用い数値化する努力がなされているが、ここでは「エピソード記述」によって、そうした数値で見える成果を支えているものを探してみたい。

「エピソード記述」とは、人の活動の意味を数値ではなく言葉で表現する質的評価の手法のひとつで、現場で起こった人の言動をその背景も踏まえて読み解くものである。もっともオーソドックスなやり方は、(1) 背景の提示、(2) エピソード本体の提示、(3) メタ観察(そのエピソード場面が直接に示す意味を超えたもの)の提示、とい

う流れで分析を進める方法で、(2)のエピソードには観察者が現場で感じたことも書き込まれる(参考:鯨岡2005年)。

ここでは、エピソード記述の手法を踏襲したうえで、(2)をワークショップ等の活動中のエピソードとし、(3)にはワークショップ等の活動そのものではない場で起こったエピソードも加え、各エピソードに(4)考察を提示する。さらに3件を総合した考察を行うことで「やってみようプロジェクト」の成果を掘り下げてみる。

(参考文献)
鯨岡峻『エピソード記述入門 実践と質的研究のために』東京大学出版会 2005年
鯨岡峻『エピソード記述を読む』東京大学出版会 2012年

1 文学座による岐阜県立不破高等学校での演劇ワークショップ

●岐阜県立不破高等学校 文学座演劇ワークショップ

- ・対象者: 不破高校1年生3クラス
- ・講師: 西川信廣(演出家/文学座)ほか
- ・実施期間: ①2019年6月5日～6日、②7月2日～3日、③9月25日～26日(全3回)
- ・プログラム内容

新入生を対象とした演劇ワークショップを実施することにより、コミュニケーション能力の向上をめざす。1クラス約30名の生徒が1回80分、年に3回のワークショップを受講。シアターゲームにより、「他者を受け入れる」「他者に自分の意思を伝える表現力を養う」「集中力を養う」などの効果があり、遅刻・問題行動・中退者の減少につながっている。

①背景

文学座は平成30年3月に岐阜県教育委員会との間で子どものコミュニケーション能力向上のため連携協定を締結した。県立高校での演劇ワークショップの実施も協定に基づくものであり、30年度の6校から令和元年度は12校へと対象校が拡大している。文学座にとって不破高校は、東濃高校で開始した岐阜県内高校を対象としたワークショップの2校目の実施校。不破高校では平成26年度から継続して実施している。

不破高校では25年度まで年間30人前後の中退者があり、遅刻や問題行動も多い状況であったが、演劇ワークショップが開始された26年度以降、中退は10人前後に激減、遅刻や問題行動も減少傾向にある。

不破高等学校 各種件数の推移 (データ提供: 不破高校)

年度	新入生	遅刻	問題行動	中退
23年度	113	4650	27	23
24年度	120	3878	23	30
25年度	108	2777	28	29
26年度	99	2194	15	13
27年度	109	1700	31	11
28年度	109	1756	17	11
29年度	120	1345	19	9
30年度	117	1277	15	11

ワークショップは1年生を対象とし、クラスごとに3回(1回80分)実施。1年生は3クラスあるが、視察を行ったのは7月2日(火)の2クラス、9月25日(水)の2クラスの様子である。ファシリテーターは演出家の西川信廣氏。男女各1名の俳優がサポートした。

②エピソード

《7月》*全3回の活動のうち2回目

・全体に生徒のおしゃべりが多く、集中力に欠ける印象。西川氏の説明の声がかき消されがちで、たびたび「まず聞く!」などサポートの俳優陣の声が飛ぶ。役者さんの声、圧倒的に大きく、生徒の意識を一瞬で集中させる力がある。

・2人または3人組になるワークでは、男女混じり合うことがほばない。人数の関係で男子の中にパートナーが見つけれなかった生徒を女子と組ませようとする、女子は座り込んで拒否した。

・同性同士でも、同じ相手と何度も組もうとし、特定の生徒とはペアにならないように意識して動くため一部の生徒はパートナーがなかなか見つからない様子が見られた。

・西川氏、生徒一人ひとりを名前でしっかり呼ぶ。

・「椅子取りゲーム」では、全員が1回ずつ鬼役になる。鬼役の生徒が歩くとき、西川氏は「ゾンビで行け」「ヤンキーで」「モデルで行こう」など、ちょっとした「演技」を要求する。嫌がり、照れる生徒が多いが、中にはそれらしい表現をする子もあり、西川氏に「いいぞ」と褒められる。一人ひとり、全員にスポットライトが当たる瞬間がある。

・俳優陣の模範演技(モデル、ヤンキーなど)での身体表現はさすが。「椅子取りゲーム」では女優さんのモデルウォーク見ただけに「あやぼんが(鬼を)やってない!」と生徒からリクエストの声が挙がる。

・活動終了後、西川氏に話しかけたり握手を求めたりする生徒の姿が見られる。

《9月》*活動の最終回

・前回と同じ2クラスを視察。生徒たちの様子が格段に落ち着いた印象。相変わらずおしゃべりが多いが、ワークへの取り組みでは集中度が増し、西川氏が語るワークの意図、集中力やコミュニケーションに関する話は静かに聞く。

・ペアワークの際にパートナーがすんなり決まり、なかなか相手が見つからない生徒の存在が目立たなくなっている。

・「ジェスチャー伝言」。ジェスチャーでお題(かまきり、くらげなど)を次の人に伝えていく。恥ずかしがって大きな動きはできない生徒が多い。それでも全員がなんらかの身体表現をしており、何人かユニークな動きも見られた。7月の「椅子取りゲーム」の様子より身体表現への抵抗感が軽減した印象がある。

・「くらげ」の表現が素晴らしい男子に、見ていた女子から「かわいい」の声が飛ぶ。ほかにも互いの表現へのリアクション(笑い、「やばい」など)が見られ、乏しい語彙ながら他者の表現を賞賛する場面が何度かあり、相互に認め合う様子を感じられる。

③メタ観察

7月の視察日、昨年度以前に受講した生徒が控室に顔を見せた。ワークショップ中に他の生徒との関係が必ずしもうまくいかなかった生徒だという。西川氏らが訪れていると聞いて会いに来たらしい。何か話したいことがある様子。年間にたった3回の活動だが、生徒たちとファシリテーターとの親密な関係が構築されていることが窺える。

9月の視察当日、不破高校の校長先生はこのワークショップをさらに発展させたいという思いを語られ、見学に来られていた他校の校長先生（今年度、初めてワークショップを実施）は「たった3回なのに生徒が変わるんですよ。生徒から引き出すあの力は私たちにはない」と話しておられた。演劇人の、教員とは異なる専門性が有効に作用していることが窺える。

④考察

7月初旬から9月下旬、2回のワークショップの間には3か月近い時間の経過があり、生徒たちは高校生活初の夏休みも経験している。この間の彼らの変化をワークショップの成果であると結論づけることは難しいが、2回の活動の観察から得られた上記エピソードを踏まえて、どのような変化が起こり、その変化はなぜ引き出されたのか、考察を試みる。

まず、集中力の向上と活動に落ち着いて取り組む様子の変化は著しい。3回の活動のうち、1回目は「警戒心があり大人しかった」（西川氏談）そうだが、2回目の7月は、前回の「楽しかった」という記憶から弾けたような態度につながったのかもしれない。9月は最終回であり、西川氏らと活動するのはこれが最後ということを生徒たちはわかっていた。西川氏の話に聞き入る様子からは、西川氏が何を伝えようとしているのか、しっかり受け止めようとする姿勢が見て取れた。これは、3回の活動が「楽しい」とどまらない、何か大切なものを得る機会であることを生徒たちが感じ取っていたために起こったことであろう。

次に、生徒間の関係性の変化も見ることができた。不破高校は単位制高校であり、生徒各自が学びたい授業を受けることができるが、同じクラスでもホームルーム以外は別々

の授業を受けており、いつも一緒にいるわけではない。他者との交流が苦手な生徒には友人ができにくい環境でもある。実施後のアンケート調査では「ワークショップで初めて話した人がいた」と答えた生徒が31人おり、平均6.5人の人と初めて話したという結果が出ている。実際に7月と比べ9月の様子は、気心の知れた相手とだけペアになろうとする様子が薄れるなど、生徒同士の関係性が深まった感がある。

また、異性を意識する年代ではあるものの、7月の活動では少し幼く感じられるほど、異性とペアになる、一緒に活動することへの抵抗感があらわだった。同性でも、日ごろから仲の良い相手とだけ組もうとする様子があったが、9月には、わかりあえている相手ではなくても、一応ペアにはなるように変化していた。さらに、身体表現等でユニークな一面を見せる生徒には、他の生徒から男女を問わず「かわいい」「やばい」など、ある種の賞賛の声が挙がるようになり、互いの個性を認め合う土壌が形成されているように見えた。これは、日常の授業や学校内での活動だけでは交流する機会が少ない相手とも、ワークショップを通じて知り合うことができたためであろう。また、ユニークな動きを見せる生徒が増えたのも、ここは安心して表現できる場である、と認識されたからであると思われる。

生徒を対象とした活動後のアンケート調査では、「クラスメイトの新しい部分に気づいた」39%、「新しく仲良くなった友だちがいる」25%という結果が出ている。先生を対象とした調査でも、25名の先生のうち21名が「普段接点のない生徒同士が交流していた」と回答している。ワークショップがきっかけとなって形成された生徒間の関係性が、遅刻者、問題行動の数、中退者の減少傾向の背景にあると見てよいのではないかと。

こうした生徒たちの変化を支えているのは、西川氏と俳優陣の演劇人としての圧倒的な専門性と人間観察力である。俳優陣の声の大きさ、鋭さ、身体表現の豊かさ、柔らかさが生徒たちの「照れ」を払しょくし「やってみよう」と思わせることにつながっていた。また、なんといっても演出家・西川氏による、生徒一人ひとりの様子を見極め、表現を引き出す声掛けから、生徒たちは「自分を認めてもらった」という感覚を得たものと思われる。見学に来ていた他校の校長先生の「生徒から引き出すあの力は私たちにはない」という言葉は決してお世辞ではないだろう。

2 ピッコロ劇団による小野市うるおい交流館エクラでの在日外国人を対象とした演劇ワークショップ

●小野市うるおい交流館エクラ 演劇ワークショップ「にほんごであそぼう」

協働団体/NPO法人北播磨市民活動支援センター（エクラ）、小野市国際交流協会、

- ・対象者：小野市に在住の外国人、日本人、外国人を雇用している企業
- ・講師：本田千恵子、菅原ゆうき、亀井妙子、中川義文（俳優/以上、兵庫県立ピッコロ劇団）
- ・実施期間：2019年7月21日、8月4日、8月25日、9月1日（全4回）
- ・プログラム内容

兵庫県小野市の人口は5万人弱、在住の外国人は約600人。国際交流協会が実施する日本語教室には100名強が参加するが、地域の日本人と交流する機会は少なく、ゴミ出しなど日常生活の行き違いが社会課題となっている。2018年のワークショップでは対象を在日外国人のみとしたが、2019年度は彼らが働く職場の日本人とその家族、小野市の職員・議員、警察官など、地域の日本人も参加できる回を設定。「空想の石を隣りの人にまわすゲーム」や「だるまさんが転んだ」、「平仮名を使ったゲーム」など、遊びながらコミュニケーションを深め、日本語をつかうことを楽しみ、自信をもってもらおう。

①背景

小野市には地元企業で働く技能実習生である外国人が多い。国際交流協会が開設する日本語教室に通う人もいるが、会社でも日本語でコミュニケーションをする機会は少なく、日本人との交流が限られているのが現状である。そのせいか、地域の人々から見ると「よくわからない」存在であり、例えばゴミ出しのルールを守らない例があると「外国人の行為ではないか」と誤解されてしまうこともある。

エクラは、社会包摂型の事業を行いたいと考え、地域の実情に詳しい国際交流協会と県内の劇団で演劇ワークショップの実績も豊富なピッコロ劇団の協力を得て、平成30年度から在住外国人に地域住民を加えた活動「にほんごであそぼう」を企画した。

調査報告（P26）でも参加者がワークショップを大いに楽しみ交流の機会として有効であった様子が垣間見えるが、以下、古賀が立ち会った現場の様子を分析することで、その成果を伝える補強材としたい。

古賀は今年度開催された4回のワークショップ（1回2時間）のうち、2回目（8月4日（日））と4回目（9月1日（日））を視察した。

ファシリテーターは、ピッコロ劇団の本田千恵子氏を中心とした俳優陣3名。

②エピソード

・ワークショップが始まる前から、ファシリテーター3人がにこやかに、フレンドリーに参加者を迎え入れる。活動中に出てくる日本語で難しいかもしれない言葉（例：演劇、俳優）は各国の言葉で何というのか参加者に尋ね、あらかじめホワイトボードに書いてある。言葉で説明すると難しいもの（例：カブトムシ）はホワイトボードの裏側に絵が描かれている（その言葉が出てくるときに披露）。

・2回のワークショップとも、活動中の参加者はずっと笑顔だった。ちょっとした失敗をして笑い、誰かのおもしろいポーズに笑っていた。

・活動中のグループ分けの際に積極的に声を出して自分で仲間を集める人、「静止画」での身体造形でユニークなアイデアを出す人など、それぞれの個性が見えた。

・2回目の活動。協会のボランティアである女子高校生が参加しており、休憩時間中に若いベトナム人女性が日本語で話しかけていた「大学生?」「家族は?」など。若い女性同士の他愛もない会話が微笑ましい。

・活動終了前に全員で輪になって感想を述べようと「楽し

かった」とほぼ全員が言う。「今日は日本人たくさんで楽しい」「いろんな国の人たくさん」「みんなやさしい」「また参加したいです」「日本語をもっと勉強したい」などなど。

・外国人と地域住民だけでなく、異なる国からやってきた外国人同士が、片言の日本語ながら交流している。終了後、LINEやFacebookの連絡先交換、写真撮影が長く続いていた。

・4回目の活動。終了前に輪になって感想を述べあう時間に、3回目も参加したというシャイな感じのベトナム人男性がハーモニカを取り出し、自作の曲を披露した。言葉で伝えきれない何かを感じ、表現したくなったのだろうか。



静止画「全員で“怪獣”」

③メタ観察

会場のエクラと最寄り駅間の移動に利用したタクシーで、年配の運転士（男性）と古賀との会話。

（古賀）小野は外国人が多いんですか？

（運転士）多いですよ。2、3年前から。占領されとるみたいですよ。食品関係の工場があって24時間稼働しとるから、11時くらいに交代で、自転車で通るのをよく見ます。タクシーを呼ぶこともあるけど片言の日本語で、駅の名前とかいうから、会社からは「とにかく行け」と言われる。スマホを見せられて「日本語出来ない」と示してくる。

あからさまな嫌悪感はないものの、なにがしかの警戒感がある様子が見て取れた。特に何か問題が起こったわけでもないのだろう…。お互いに相手のことを知ればこの感覚は緩和されるのではないかと感じた。

参加した外国人の方たちは、日本で働いているのに職場で日本語を使ったり日本人と話したりする機会はほとんど

ないという。日本語教室では日本語教師とは話をするものの、それ以外の日本人と話す場は、意識的につくらなければいけない状況である。この活動では、特に4回目は日本語教室のボランティアとその家族、市議会議員、警察官など多様な日本人の参加があった。参加者を集めることについては、国際交流協会の熱心な働きかけがあったとのことである。

また、参加した外国人同士は、同じ日本語教室に通う人が多いとはいえ、あまり交流はなく互いに知り合いではない。日本語教室ではイベントも行われているが、同じ国の人同士で固まってしまうのが常であるという。

④考察

エクラでの活動が2年目となる令和元年度は、前年の経験を踏まえ、国際交流協会の日本語教室に通う外国人以外にも外国人を雇用する企業等へ働きかけ、参加者を募るなどしている。先の評価報告にもあるように、この働きかけにより市内外国人の実態や企業ニーズの把握につながった一方、ワークショップ参加者のプロフィールを把握することは困難になり運営の難易度はあがった面がある。

評価報告では、「課題分析の妥当性」「内容の妥当性」「実施の適切性・十分性」「効果」「継続性」の五つの観点から主要な関係者である国際交流協会、ピッコロ劇団、エクラによる総括が行われ、「継続性」について「大いに良い」、その他の観点について「ある程度良い」と結論づけられている。特に「継続性」は、ワークショップを支える関係者が地域の実情やニーズを細やかに汲み取る努力をされた結果、得られた手ごたえであり、関係者の努力に敬意を表したい。

多文化共生の観点からは、外国人と日本人の交流の機会を創出することが重要視されるが、それだけでなく、出身地がさまざまである外国人同士の交流の機会づくりも、彼らが日本の地域での生活に馴染むためには重要である。演劇ワークショップは必ずしも言語に頼らない活動が可能であり、共同による創作活動を通じた交流が可能であることから、このような場に有効であるといえるだろう。

例えば4回目は参加者全員が輪になっての自己紹介から始まり、リーダーの動きをマネして回していく「ゲー&パー回

し」などから、アイコンタクトや挨拶を交わしながら歩くワーク、ひらがなを使った単語づくりやグループでテーマを身体表現する「静止画」へと進展していた。日本語の理解が十分でなくても楽しく参加でき、みんなと一緒に作る活動がプログラム化されているため、外国人/日本人、大人/子どもと多様な参加者みんなが「楽しい」と感じる場になっていた。特に「静止画」のような、参加者が共同してひとつの場を創り上げる活動が有効に作用していたといえる。

また、「楽しい」からこそ「日本語を学ぶ」「外国のことを知る」ことに関する参加者のモチベーションの向上につながっているといえよう。

参加した外国人の多くはまだ若く、生まれ育った国を離れて生活するなか、さまざまなことを感じていると思われ

るが、細やかな感情や想いを表現するには言語の壁が厚く感じられることもあるかもしれない。シャイなベトナム青年がハーモニカ演奏を披露した場面は、ワークショップが表現欲求を刺激し、想いを表出することが許される場として受け止められているものと見ることができる。人々の労働や生活が繰り広げられる「地域」には、このような機会も必要ではないだろうか。

参加者にこうした場を提供できているのは、本田氏をはじめとするファシリテーターの明るく温かなキャラクターに負うところが大きい。また在住外国人へのサポートを行う国際交流協会のスタッフの方々の熱意も「みんなやさしい」「また参加したいです」という参加者の感想を引き出した大きな要因である。

3 NPO法人日本演劇情動療法協会による 富沢病院（仙台）における活動

●日本演劇情動療法協会 演劇情動療法セッション

- ・対象者：仙台富沢病院に入院中の認知症患者のうち約10名
- ・講師：前田有作（NPO法人日本演劇情動療法協会理事長／俳優・演出家）
- ・実施期間：2018年7月20日～毎週金曜日約1時間
- ・プログラム内容

講師が新聞記事、小説、落語、戯曲等を朗読し、その前後に参加者と語り合うことで、認知症患者の情動を刺激。情動機能の低下を予防し、認知症の周辺症状（暴力・暴言・徘徊・拒絶・不潔行為・抑うつ・不安・厳格・妄想・睡眠障害等）を緩和することで、社会生活をよりよく過ごせるように支援する。

①背景

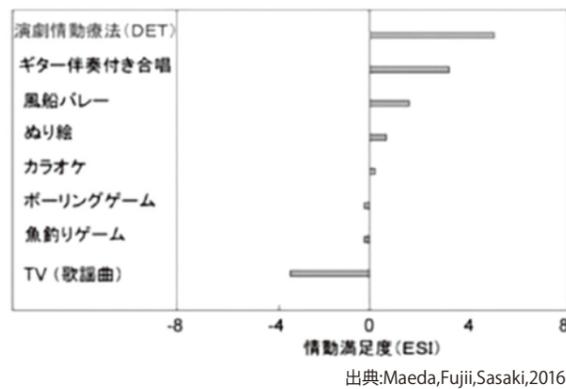
演劇情動療法とは、認知症でいわゆる認知機能が低下しても、一方で比較的保たれている怒り、泣く、喜ぶなどの情動機能に働きかけ、社会生活を円滑に送れる状態を保つようにするものである。仙台を拠点とするNPO法人日本演劇情動療法協会（理事長：前田有作氏）が富沢病院とともに、演劇的手法で認知症患者を感動させる事業を展開しエビデンスを積み重ねている。具体的には、10人ほどの対象者に演劇情動療法士による朗読を1回1時間程度、週1回実施し、その前後の自由な会話も交えて参加者

の情動を刺激する（参考：藤井ほか2018年）。

演劇情動療法については、富沢病院の藤井昌彦医師、佐々木英忠医師、そして前田氏らが著書や論文でそのエビデンスを発信している。例えば、藤井医師らが情動満足度指数（Emotional Satisfaction Index：ESI）を測定したところ、認知症患者の情動に働きかけるさまざまなプログラムのうち、もっとも高い反応を示したのが演劇情動療法であり、ギター伴奏つき合唱や風船バレーはプラスの反応があるが、テレビ観賞には否定的な反応が示された（参考：Maeda, Fujii, Sasaki, 2016）。また藤井医師によれば、演劇情動療法を受けたグループの抗精神病薬（ジェネリック使用）の減薬効果は一人あたり年間1万円だという。演

劇情動療法の調査期間中の3か月間、療法参加者は転倒による大腿骨頸部骨折や誤嚥性肺炎などの合併症の発症が1例も見られず、この予防効果を金額に換算すると一人当たり約23万円という数値も提示されている（本報告書のために試算されたもの）。

情動満足度指数



富沢病院では毎週金曜日に演劇情動療法が実施されている。参加者は入院患者であり（平成30年7月まではデイサービスで実施）、医師によって選ばれ、毎週入れ替わることが多い。

古賀は8月30日（金）午後視察。朗読は前田氏が担当し、サポートとして女性スタッフが1名、ほかに病院スタッフが2、3名、入退室しながらついてきた。この日は男性4名、女性4名が集まったところで活動が開始された。前田氏は、「久しぶりですね」「Aさんは大阪出身でしたね。大阪の話を見つけてきました」などと、参加者と会話している。8月なので戦争の話、今の平和な日本を支えてくれた人々への感謝を忘れないために読みます、と前置きがあって、自己紹介をした後、「朗読を聞いてもらうことが俳優の義務です」と語る。そしておもむろに大石清伍長「妹への手紙」を読み始める。朗読時間は10分ほど。その後、参加者に感想を聞き、さらに百田尚樹『永遠の0』の一部を30分ほど朗読。再度、参加者に感想などを聞いて10分程度の会話の後、終了。

②エピソード

- ・前田氏、参加者との会話を導入として、朗読の始まりへの流れが切れ目なく、とてもスムーズである。
- ・朗読が始まると参加者は集中して静かに聞き入ってい

る。後半、約30分と長めの朗読でも集中している様子。時々うなずきながら聞いている。入院患者が対象なので、認知症の重い方々であろうと想像していたが、いたって穏やかであった。目を閉じている人もあり、部分的に眠っていた人もいたかもしれない。

- ・大阪出身の男性。空襲の体験を聞かれると、死体をたくさん見たこと、潜水艦に乗っていた叔父が戦後に宇治の橋から身を投げて死んだことなどを話し、戦争は嫌だ、とはっきり語った。
- ・朗読に心を動かされた様子の女性患者がスタッフにしきりに話しかけ、スタッフと手を握り合っていた。
- ・自衛隊出身の男性。「妹への手紙」に「すばらしい日記ですね」と感想を述べる。前田氏が「Bさんも国の守りをやってくさったんですね」と言うと、B氏、誇らしげに「やりました！」。
- ・復員した人が食べ物を通してもらっているのを見た、と話すがあり、それにうなずく人もいる。
- ・前田氏をサポートする女性は参加者全員の名前を覚えており、入室すると必ず名前を呼んで話しかけていた。

③メタ観察

前田氏が活動を始めた当初は参加者に「帰れ」と怒鳴られたこともあったが、富沢病院の佐々木医師から「怒りの情動を動かした」と評価されたという。現在の活動は、朗読する作品の選定や朗読に入る前後の会話の展開が、参加者のバックグラウンドに対する情報収集によって入念に練られている。

同院の藤井医師は、これまでの医療は生活の質“Quality of life”の向上を掲げてきたが、今後は“Value of life”の時代になるのではないか、と述べている（2020年2月5日、日本劇団協議会事務局によるヒアリング）。たとえ残りの日々が短くても、歓喜的情動に満たされて幸福度をあげることが重要であり、文化芸術はそのため大きく貢献できるという考えのもと、演劇情動療法を実施しているという。

また、朗読中に女性の参加者がスタッフと手を握りあう様子が見られたが、朗読に心を動かされた二人の間にながしかの感情の交感があったものと思われる。このように気持ちが触れ合う経験は介護職と患者の関係をよりよ

いものにするだろう。

さらに、視察当日は県外の病院から医療スタッフの研修の一団が訪れていた。その参加者のひとりが演劇情動療法の見学、藤井医師らの講話の後に「以前にも富沢病院を訪問したことがあるが、患者さんが穏やかになり、スタッフも表情が明るくなっている」と述べていた。これを演劇情動療法の成果である、とするのは早計かもしれないが、直接の対象である認知症患者以外にも何らかの影響が波及している可能性はあるのではないかと。

④考察

朗読中の参加者の集中した様子、前田氏とのやりとりを見ると、この活動によって参加者のさまざまな記憶が呼び覚まされたことが窺われる。今回の活動は、「今の自分たちの幸せを支えてくれた人々への感謝」という、前田氏が伝えたいメッセージがはっきりしており、単純に「戦争物」の話で泣かせるために朗読作品を選定しているわけではない。参加予定者の中に、物語の中に出てくる街の出身者や、自衛隊の関係者がいることも踏まえた作品選定であった。こうした入念な準備と朗読の高度な技術によって活動が支えられ、エビデンスにつながっているであろう。

4 総合考察

演劇の持つ力を社会のさまざまな領域で活かす。

「やってみようプロジェクト」の趣旨はそこにある。

では、社会のさまざまな領域で活かされる演劇の力とはどういうものなのか。その力は上述の3件の活動に共通してあらわれているのだろうか。

「やってみようプロジェクト」の活動は、多くの場合、ワークショップの形式で行われる。演劇ワークショップについては、いくつかの特性があるといえるだろう。

例えば、

さらに、朗読を聴いていた女性とスタッフとの感情の交感については、演劇情動療法を家族と一緒に実施することを勧める藤井医師らの考え方に通じる。藤井医師らは認知症で何もわからなくなってしまったと思っていた親や伴侶が朗読を聴いて感激する様子を見た家族の喜びも演劇情動療法の効果として指摘しており（参考:藤井ほか2017）、同じ朗読を聴き、心が動く様子を共有することが、患者と家族、入院中の患者と介護を担当するスタッフとの関係性の変化をもたらす可能性にもつながる。患者の意思・意図が伝わらない、感じられないことが介護者の疲弊を生み、さらには患者の虐待などにつながる一因になりかねないことを思うと、演劇情動療法は認知症の当事者だけでなく介護を担う家族やスタッフへの効果もあるといえるだろう。

（参考文献）

- 藤井昌彦、佐々木英忠「認知症は治療可能な疾患か？—BPSDの情動療法から見た考察」『日本老年医学会雑誌』第54巻第2号 2017年
- 藤井昌彦、前田有作、金田江里子、佐々木英忠『認知症情動療法』芳林社 2018年
- 前田有作、藤井昌彦、佐々木英忠「認知症患者の演劇情動療法」『The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine』vol.55 No.12 2018年12月
- Maeda Y, Fujii M, Sasaki H : Emotional satisfaction index for dementia patients. Geriatr Gerontol Int 2016 : 16:

人とのつながりをベースとしている=共同性

現実とは異なる安全な環境のなかで羽ばたくことができる=虚構性

そしてなんととっても、

楽しみながらさまざまなことにチャレンジできる=遊戯性

「やってみようプロジェクト」でも、こうした演劇の手法が持つ特性が発揮されている。ワークショップのような能動的な活動では、共同性と遊戯性のもと、楽しみながら交流し、参加者同士の関係を構築しており、虚構性のも

と、安心して表現することができる場がつくられている。

それでは、鑑賞型の活動である富沢病院での演劇情動療法ではどうだろうか。朗読の時間は入院中の参加者にとって非日常の楽しみといえるかもしれない（遊戯性）。そして前田氏の朗読のあと、自らの記憶をたどり話し始める高齢者の様子は、ある種の「表現」であったと思う。朗読された物語の虚構性のもとに感情が増幅されていたように見えた。そして、安全な環境でその感情の「表現」を受け止めてもらえる場が形成されていた。また、スタッフと手を取り合った女性患者の姿には、他者とのつながりを実感しながら感情を交感する共同性が見られた。

ワークショップと朗読の鑑賞という手法の違いはあれど、演劇の特性が生かされた活動であることは共通している。

3件の活動に共通して見られたことをもう1点指摘しておきたい。

それは、「やってみようプロジェクト」の活動が、直接の対象者だけでなく、対象者に接する人たちに対する効果や、対象者と周囲の人の関係を変える効果もあることである。

富沢病院ではスタッフの変化や患者との関係性への影響が示唆された。エクラでは今後、在住外国人が勤務する企業の関係者や彼らの住居の近隣住民の参加が得られれば、外国人も日本人も暮らしやすい地域の形成につながるであろうことは想像に難くない。不破高校の先生を対象としたアンケート調査では「生徒の新しい部分に気づいた」と思う人が回答者22名中18名（「そう思う」「とてもそう思う」の計）、「ワークショップで生徒との接し方に新しい発見があった」と思う人が22名中12名（同上）という結果が出ている。身近な先生たちの生徒を見る目が変わることも、中退、問題行動などの減少につながる要因のひとつといえるのではないか。

このような、当事者とそれを取り巻く人々や地域・社会との関係性構築や既存の関係性の改善の重要性を指摘することは、「社会的処方」の考え方にも通じる。「社会的処方」とは、「人とのつながりが無い＝社会的孤立」を解決する方法の一つとして近年注目されているもので、ある人が抱える、医療的なケアだけで解決できない問題を地域における多様な活動とマッチングすることで支援する考

え方である。例えば「眠れない」という患者に医師ができることは睡眠薬の処方かもしれないが、その人のニーズや好みに合わせてダンスサークルなど地域での活動を紹介することで、本人がよりよく生きられる場合もある。社会的処方の考え方では「人から施されるだけではなく、自らが支援する立場にも立てる」「ほかの人たちとつながることができる」「学び続けるものを持っている」「身体的・精神的に活動的である」「周囲で起きていることに注目している」という五つの方法を支援することが目的であるとされている（参考：西 2020年 P38）。各地での演劇ワークショップの場で見られた、人と人との関係性構築・改善は、まさに社会的処方の考え方に添うものであった。

演劇ワークショップや朗読鑑賞の場への参加は「非日常」だが、そこで生まれた何かが「日常」を変えていく。その様子が「やってみようプロジェクト」の現場では確認できた。そしてそれを支えているのは、演劇人の高度な専門性であった。こうした活動が継続され拡大することを願ってやまない。

（参考文献）
北九州芸術劇場『ドラマによる表現活動記録集 2000年度－2003年度』
古賀弥生・藤本学（2017）「応用演劇の手法による就労自立支援プログラム開発の成果と課題」『日本アートマネジメント学会第19回全国大会<奈良>予稿集』
西智弘編著『社会的処方 孤立という病を地域のつながりで治す方法』（学芸出版社、2020年）

社会包摂から 「社会的処方箋」としての 劇場価値へ向かう

衛 紀生

（日本劇団協議会理事／可児市文化創造センター 館長兼劇場総監督）

日英共同制作『野兎たち』の英国・リーズ市での稽古2日目に、リーズ・プレイハウスの芸術監督ジェームス・ブライニングが手の空いている劇場スタッフ30人ほどを引き連れて稽古場に姿を現しました。稽古初日が定例の幹部ミーティングと重なってしまったためにウエルカムの挨拶に来なかったことを詫びた後、その幹部会議で「今後はプレイハウス自体が『社会的処方箋』としての存在価値を持つことを目指すことが話された」という報告がありました。リーズ・プレイハウスは、ウエストヨークシャー・プレイハウス時代から英国随一のコミュニティ・アプローチ年間およそ1000実施しており、「北部インクランドの国立劇場」とか「コミュニティ・ドライブ」という定冠詞がつけられる英国随一の規模を誇る劇場でした。ジェームスはプレイハウスの成立経緯を「1968年、当時は貧しい地域であったリーズ市の市民運動によって誕生しました。劇場が様々な生い立ちを持つ人々やあらゆるコミュニティの人々に影響をもたらすことを、運動を率いたリーズ市民は強く信じていたからです。『市民のための劇場』という創立時の精神は、現在のプレイハウスにも息づいています」と語っています。

私どもアーラも、2015年に「ガーディアン」紙に掲載された当時の英国芸術評議会議長のピーター・バザレットの「Use the arts to boost the nation's health(芸術を使って国の健康を増進する)」と題された寄稿記事を読んで関連資料にあたり、4年前から世界劇場会議国際フォーラム等で社会包摂型劇場経営の最終的なグランドデザインは、劇場の存在自体が人々の心身を継続的に癒し続けて、生きる意欲に影響を与え地域に健やかな環境を成立させる、まちを元気にする「社会的処方箋」という公共的・社会的な役割を担うものとしての政策的認知

を目指すことを主張し続けてきました。アーラの『まち元気プロジェクト』は現在、年間536回でその触先は『社会的処方箋』に向けられています。私の目指す『社会的処方箋』は、英国のそれを教育・福祉・保健医療・多文化共生等の全政策に演繹させて、国及び自治体の各政策予算を抑制させる所得再分配機能をもった総合的社会政策としての文化政策に向かうものです。

さて、2008年に「社会包摂型」の劇場経営を掲げて出発したものの、当初は利他的なその理念は理解されず、岐阜の片田舎での実証実験的なその試みはしばらく大きく、しかも高い壁に突き当たっていました。2011年の「第三次基本方針」で「文化芸術の社会包摂機能」と「戦略的投資」の文言が明示されても、全国公文協アートマネジメント研修会の懇親会に出たアーラの職員が東京のリーディングシアターのエグゼクティブから「社会包摂は流行言葉」との無責任な発言を浴びて意気消沈して帰ってきたことがありました。「人間が一番難しいのは、新しい考えを受け入れることではなく、古い考えを捨てることだ」。古い経済観念と戦ったジョン・メイナード・ケインズという言葉です。幸いと言ってよいのかはいささか逡巡しますが、この2年ほどで「社会包摂型プロジェクト」が全国に燎原の火の如く広がっています。それが「善いことをしている」という自己充足的なことに終わらずに、演劇をはじめとする文化芸術の、社会から排除され、孤立して孤独に苛まれている人々の「存在を癒す」強かな機能に着目して、大きなデザインに向かうことを祈念するばかりです。

今年の世界劇場会議は『「芸術の社会包摂」その社会的価値をとらえなおす』のタイトルで開催して、「演劇情動

療法」の東北大学医学部教授藤井昌彦先生とNPO法人日本演劇情動療法協会の前田有作氏に私との鼎談をしてみました。さいたまセッションの私の基調講演のあとに藤井先生から1枚のメモを手渡されました。私の基調講演は、「演劇情動療法」の財政的抑制効果として、その減薬・介護の費用が、団塊の世代が後期高齢者となる2025年には認知症患者が厚労省推計で730万人になり大きく膨らみます。減薬と介護費用の抑制効果は、藤井先生の理事長を務める仙台富沢病院で調査したところ、「演劇情動療法」の2025年における減薬効果は788億4000万円と推計され、これに介護費用が加算されます。

演劇情動療法を受けたグループの抗精神病薬の減薬の実態 (ジェネリック使用の場合)

クエチアピン (25mg)
平均3.2錠/日 n=7
@10円×3.2×7=221円

リスペリドン (0.5mg)
平均0.875錠/日 n=4
@13.7円×0.875×4=48円

ジプレキサ (2.5mg)
1錠/日 n=1
@91円×1×1=91円

上記の抗精神病薬がDET(演劇情動療法)によってそれぞれ中止となりました。

これを計算すると、比較的薬価の抑えられているジェネリック薬剤を使用していた場合においても、この減薬費用は1日360円、月1万800円、年12万9600円。

これをnで割ると一人当たり1万800円/年、約1万円の薬剤節約効果があるといえます。

藤井先生からのメモには、投与される大量の抗精神病薬が原因の認知症の主な合併症として誤嚥性肺炎と大腿骨頸部骨折があげられていて、それぞれ「55日入院・医療費170万円」と「20日間入院・医療費220万円」と書かれてありました。

転倒による大腿骨頸部骨折や誤嚥性肺炎などの合併症の発症は、3か月のDET調査期間には対象者は一例も認められなかったことが確認されています。一方、コントロールの病棟(48床)では2か月に1例の転倒による大腿骨頸部骨折、ひと月に1-2例の誤嚥性肺炎の発症が起こったことを鑑みると次のように予測されます。

大腿骨頸部骨折の予防効果 (3か月)

1.5例×@220万円=330万円

誤嚥性肺炎の予防効果 (3か月)

4.5例×@170万円=765万円

約1100万/48人としてDET(演劇情動療法)対象者一人当たり約23万円の予防効果が得られているともいえると思います。

対象になる認知症患者のそれぞれ1.5%が罹患すると、年間4270億円という医療扶助費が発生することになります。

「演劇情動療法」自体の抑制効果と合算すれば、なんと5058億4000万円もの抑制効果となります。少子高齢化の福祉予算対策として、毎年負担増と支給減の議論を繰り返す非生産的な税制論議よりも、この社会投資的

回収率の数値に依拠して財政の在り方を検討の方がはるかに生産的だと思うのは私だけでしょうか。

演劇をはじめとする文化芸術の社会包摂機能を存分に展開させることで、そのエビデンスを明確にとらえて、それを政策立案に反映する考え方はEBPM(Evidence-based Policy making)と言い、財政逼迫の環境にあつて、限られたリソースを有効に活用するために近年各方面で主張されています。文化芸術の社会包摂機能は、「つながりの貧困」によって生じる種々の社会課題を解決に向かわせるために教育・福祉・保健医療・多文化共生等の各政策との適正なマッチングによって効率的に政策的投資を行うために用いられるべきと私は考えます。すなわち、「社会的処方箋」に触先は向いていると思います。それによって、文化芸術に対する国民的・社会的合意を形成して「真の文化国家」を目指すべきと考えています。

以上が簡略して記述しましたが、社会包摂から社会的処方箋、そして国と自治体の行財政改革へアップロードする流れのあらあらです。そのアップロードを実現するために、私は昨年9月末の芸術文化振興基金運営委員会で、助成金決定の際に事業支援額にマッチングさせて社会的投資回収率を算出し、その数値の学際的な定性評価を出すための調査研究費をつけるべきで、その検討委員会を来年度に設置すべき、との提案を事務方に致しました。「善きことの自己充足」から脱して、先のアップロードを実現するためには、社会的投資回収率の算出と定性的評価はマストです。このエビデンスがなければ何も前進しません。国立研究開発法人科学技術振興機構が、従来からの自然科学に限定された支援から、社会科学系(経済学・経営学・公共政策学等)をも視野に入れなけれ

ばとの考えが組織内に出始めている、という話を仄聞しています。政策効果等のインパクト・スタディにおける研究は、私が比較的ウォッチングしている英国に比べて著しく遅れています。この研究分野の進捗と先のアップロードを平行に並走させなければ、「世界に誇る生きやすさ一番の文化国家」に1ミリでも近づくことは出来ないのです。

演劇関係者と音楽関係者はそのための専門的スキルの保有者であることを自覚して、そのような未来を創出する担い手であることを強く自覚してほしいと切に願うばかりです。



文化庁

文化庁委託事業

令和1年度障害者による文化芸術活動推進事業

(文化芸術による共生社会の推進を含む)

やってみようプロジェクト

2020年3月

発行：公益社団法人日本劇団協議会

〒160-0023

東京都新宿区西新宿3-12-30 芸能花伝舎3F

TEL：03-5909-4600

FAX：03-5909-4666

監修：衛紀生 福島明夫

デザイン：西英一

印刷：株式会社平河工業社

演劇は
社会の
処方箋